ISSN 2188-5591

第66回

日本西洋史学会

大会報告集

2016

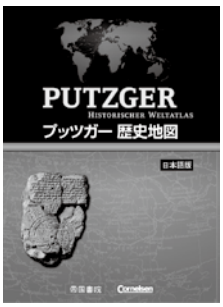
2016年5月21日（土）・22日（日）

慶應義塾大学三田キャンパス

プッツガー歴史地図 日本語版

詳細な歴史地図が満載！

ドイツの世界歴史地図「PUTZGER Historischer Weltatlas」の日本語版。地図だけでなく概説的記述や年表などを加えた、世界史学習者必携の書！



●ISBN 978-4-8071-6099-0 ●縦 340 ㎜ × 横 250 ㎜ ●本体 9,500 円（税別）
●312 頁

大好評！ 地図などの図版を豊富に掲載した資料集！サブテキストにも最適

最新世界史図説 タペストリー

「タテの流れ」と「ヨコのつながり」を整理した世界史資料集の決定版！

●ISBN 978-4-8071-6240-6 ●AB 判
●本体 867 円（税別） ●348 頁

明解世界史図説 エスカリエ

「時代の扉」と「クイズ」で世界史の学習が楽しくなる資料集！

●ISBN 978-4-8071-6241-3 ●AB 判
●本体 809 円（税別） ●240 頁

帝国書院 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-29
TEL 03-3261-9038 FAX 03-3234-7002 https://www.teikokushoin.co.jp/

第 66 回日本西洋史学会大会全体プログラム

第１日目：2016 年5月21日（土）

東／西日本懇談会　11:00-11:30（北館３階大会議室／研究室棟１階AB 会議室）
理事校会議　11:30-12:30（北館３階大会議室）

受付開始　11:30　（西校舎１階掲示板スペース）

ポスターセッション 12:00-14:00（展示12:00-17:30　西校舎１階512，513，515，516）
公開講演　14:30-17:30（西校舎１階ホール：詳細は7頁、27～29頁参照）
総会　17:30-18:00（西校舎１階ホール）
懇親会　18:30-20:30（西校舎地下１階生協食堂）

第２日目：2016 年5月22日（日）

受付開始　8:30　（西校舎１階掲示板スペース）

部会別自由論題報告 9:00-12:15（詳細は8～16頁、30～54頁参照）
- 古代史部会　（西校舎３階532）
- 中世史部会　（西校舎２階527）
- 近世史部会１（西校舎２階528）
- 近世史部会２（西校舎２階526）
- 近代史部会１（西校舎１階519）
- 近代史部会２（西校舎１階517）
- 現代史部会１（第一校舎２階121）
- 現代史部会２（第一校舎２階123）
- 現代史部会３（第一校舎３階133）

ポスターセッション 12:00-14:00（展示9:00-17:00）
（西校舎１階512，513，515，516：詳細は17～22頁参照）

小シンポジウム　14:00-17:15（詳細は23～26頁、55～73頁参照）
- 小シンポジウム１（西校舎２階526）
- 小シンポジウム２（西校舎２階528）
- 小シンポジウム３（西校舎１階517）
- 小シンポジウム４（西校舎１階 519）

【連絡事項】

昼食場所（第２日目）

開催校として弁当の手配はいたしません。第２日目（５月２２日）には、慶應義塾大学三田キャンパス**「山食」**（西校舎中階学生食堂）をご利用ください（場所については３～４頁参照）。営業時間は**１１：３０～１４：００**です。日曜日に生協食堂（西校舎地下１階）は営業しませんので、お気をつけください。

飲み物の自動販売機

自動販売機は第一校舎南側に７台（二カ所に分かれて４台と３台）、生協食堂に４台、購買施設棟入口前（西校舎地階出口前）に３台設置されています。

報告者・司会者控室（第２日目）

西校舎２階５２２（４頁参照）

休憩室

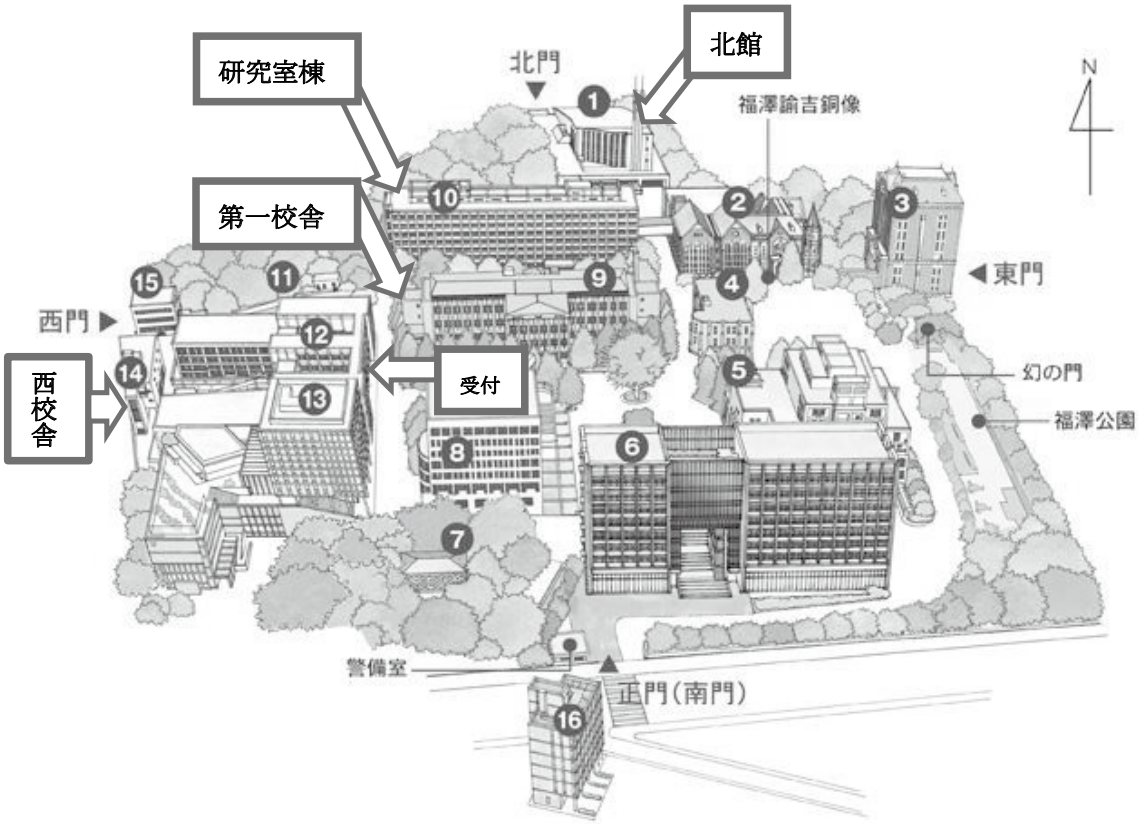
第一校舎１階１０１（６頁参照）

出版社の展示・販売

第一校舎１階１０２，１０３，１０４，１０５（６頁参照）

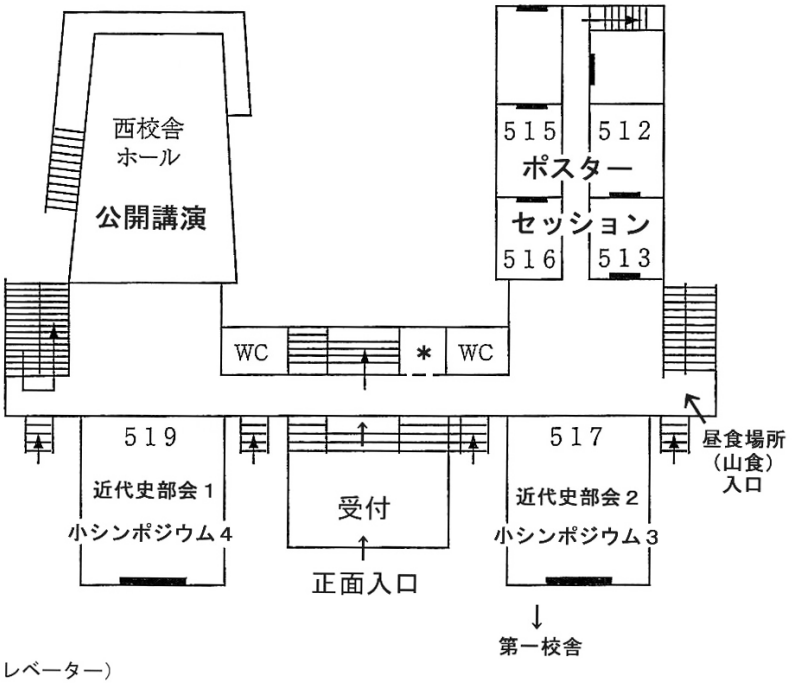
第６６回日本西洋史学会大会会場案内図

〈 慶 應 義 塾 大 学 三 田 キ ャ ン パ ス マ ッ プ 〉



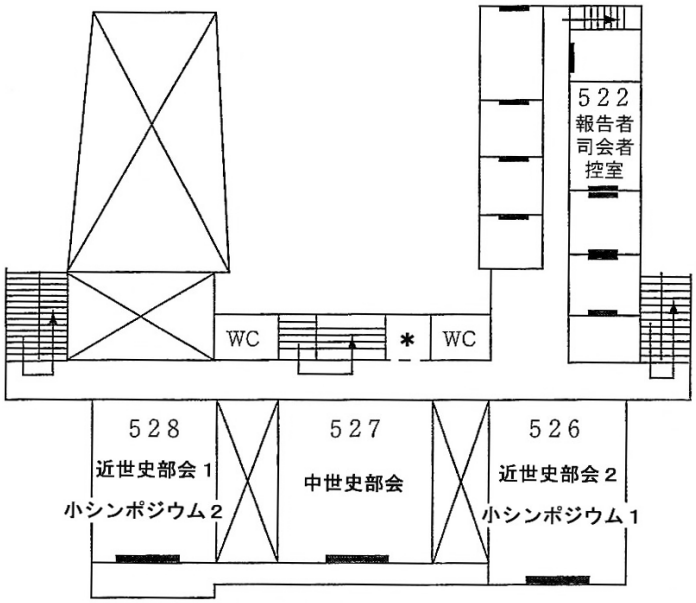
【1】北館：大会議室（３階）など	【2】図書館旧館	【3】東館
【4】塾監局	【5】図書館	【6】南校舎
【7】三田演説館	【8】大学院校舎	**【9】第１校舎：101-147**
【10】研究室棟　：AB 会議室（１階）など	【11】労働組合本部	**【12】西校舎：501-545、ホール、生協食堂、山食**
【13】南館	【14】購買施設棟：生協購買部	【15】西館
【16】南別館		

西校舎　１階



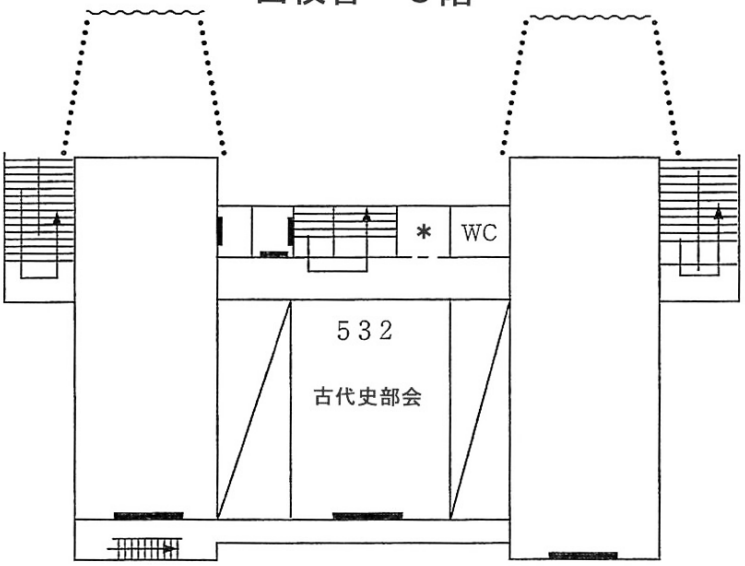
（＊　エレベーター）

西校舎　２階



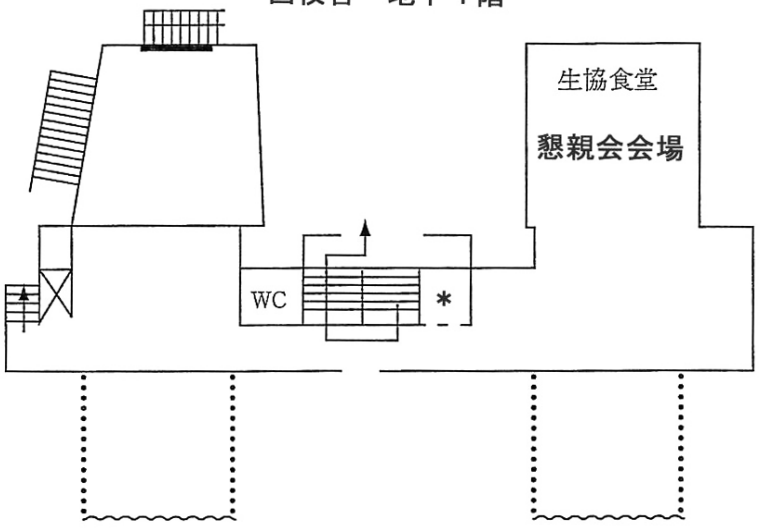
（＊　エレベーター）

西校舎　３階



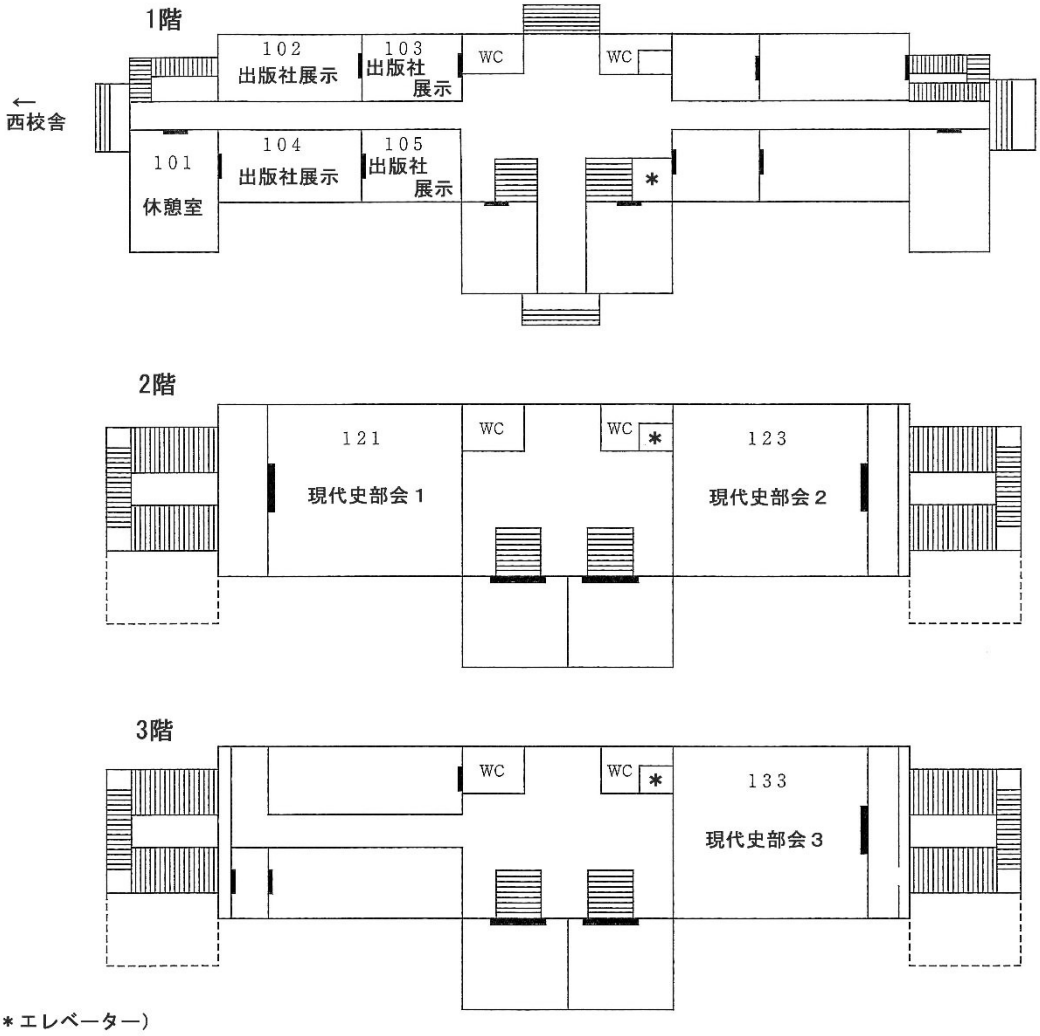
（＊　エレベーター）

西校舎　地下１階



（＊　エレベーター）

第一校舎


1階
←
西校舎
102
出版社展示
103
出版社
展示
WC
WC
101
休憩室
104
出版社展示
105
出版社
展示
*
2階
121
現代史部会１
WC
WC
*
123
現代史部会２
3階
WC
WC
*
133
現代史部会３

（＊エレベーター）

第６６回日本西洋史学会大会プログラム

会場：慶應義塾大学三田キャンパス

第1日目：２０１６年5月２１日（土）

東日本懇談会　１１：００～１１：３０（北館３階大会議室）
西日本懇談会　１１：００～１１：３０（研究室棟１階 AB 会議室）
理事校会議　１１：３０～１２：３０（北館３階大会議室）
受付開始　１１：３０　（西校舎１階掲示板スペース）

公開講演　１４：３０～１７：３０（西校舎１階ホール）

木畑　洋一（成城大学教授）

「近現代世界とヨーロッパの位相」

鈴木　董（東京大学名誉教授）

「イスラムの衝撃と近現代西欧」

司会　大森雄太郎（慶應義塾大学教授）
　　清水　明子（慶應義塾大学准教授）

ポスターセッション
＊ポスターによる３４の研究報告を予定しています（詳細は１７～２２頁参照）。

総会　１７：３０～１８：００（西校舎１階ホール）

懇親会　１８：３０～２０：３０（西校舎地下１階生協食堂）

第２日目：２０１６年5月２２日（日）

受付開始　　８：３０　　（西校舎１階掲示板スペース）

部会別自由論題報告　９：００～１２：１５

◆古代史部会（西校舎３階５３２）

9:00-9:35

１．反田　実樹（法政大学・院）　　司会：坂口　明（日本大学）

「ローマ帝政期の製粉所・製パン所における労働」

9:40-10:15

２．増永　理考（京都大学・院）　　司会：新保　良明（東京都市大学）

「公共建築物造営にみるローマ帝政前期小アジアの都市社会
―エフェソスを中心に―」

10:20-10:55

３．奥山　広規（広島商船高等専門学校）＋ 向井　朋生（国立西洋美術館）

司会：青柳　正規（東京大学名誉教授）

「文字史料 vs. 考古資料
―オスティア・アンティカ「七賢人の部屋」を例として―」

11:00-11:35

４．遠藤　直子（東北大学・院）　　司会:桑山　由文（京都女子大学）

「帝国支配におけるウェスタの神女」

11:40-12:15

５．大谷　哲（立教大学）　　司会:豊田　浩志（上智大学）

「カエサレアのエウセビオス『教会史』８巻における目撃情報」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１２：１５

◆中世史部会（西校舎２階５２７）

9:00-9:35

１．髙橋　謙公（早稲田大学・院）　　司会:山辺　規子（奈良女子大学）

「13-14 世紀における二つのシチリア王国と港湾行政
―港からみた王権の地方統治―」

9:40-10:15

２．坂下　拓治（慶應義塾大学・院）　　司会:鶴島　博和（熊本大学）

「14 世紀スコットランドにおける限嗣相続の発展
―ブルース朝の王証書の分析を通じて―」

10:20-10:55

３．宮城満里奈（日本女子大学・院）　　司会:甚野　尚志（早稲田大学）

「15 世紀イングランド王権における予言―ヘンリー４世をめぐって―」

11:00-11:35

４．足立　峻一（駒澤大学・院）　　司会:新井由紀夫（お茶の水女子大学）

「写本から初期印刷本への移行―*The Temple of Glas* を中心に―」

11:40-12:15

５．鶴島　博和（熊本大学）　　司会:赤江　雄一（慶應義塾大学）

「11 世紀イングランドにおける塩の生産と流通」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１１：３５

◆近世史部会１（西校舎２階５２８）

9:00-9:35

１．小川　仁（京都大学・研究員）　　司会:根占　献一（学習院女子大学）

「贖宥状と海外布教

―コロンナ家に発行された天正遣欧使節贖宥状をめぐる問題―」

9:40-10:15

２．原田亜希子（慶應義塾大学・院）　　司会:北田　葉子（明治大学）

「近世教会国家体制下におけるローマ都市政府の Terre del popolo 統治」

10:20-10:55

３．高橋　裕一（法政大学・研究員）　　司会:椿　建也（中京大学）

「ジョン・ノードゥン『測量査定士の対話』考

―「プロフェッション」概念の観点から―」

11:00-11:35

４．佐藤　正樹（日本大学）　　司会: 伏見　岳志（慶應義塾大学）

「フェリペ４世の財政改革期ペルー副王領における教会と国家

―リマ市聖堂参事会による十分の一税の運営をめぐって(1639-1648 年)―」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１２：１５

◆近世史部会２（西校舎２階５２６）

9:00-9:35
１．谷田　利文（大阪大谷大学・京都大学）　司会:髙澤　紀恵（国際基督教大学）
「17 世紀末フランスにおけるポリスと宗教
―ジャン・ドマ『公法論』を中心に―」

9:40-10:15
２．大場はるか（九州大学・研究員）　司会:皆川　卓（山梨大学）
「イエズス会士フランツ・ラング（1654-1725 年）の演劇論
―演劇関係の史料とドイツ語圏の近世史研究の可能性―」

10:20-10:55
３．田瀬　望（ニース大学・院）　司会:深沢　克己（京都産業大学）
「啓蒙期フランスにおけるフリーメイソンと善行
―ボルドー「フランス」会所によるアルジェの奴隷救出の事例から―」

11:00-11:35
４．見瀬　悠（パリ=エスト大学・院）　司会:長谷川まゆ帆（東京大学）
「啓蒙の世紀フランスにおける外国人遺産没収権
―パリ・サン=ジェルマン=デ=プレ地区における実施の事例から―」

11:40-12:15
５．鈴木　佑梨（お茶の水女子大学・院）　司会:豊川　浩一（明治大学）
「18 世紀ロシアにおける貴族
―ヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーキーを手がかりに―」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１２：１５

◆近代史部会１（西校舎１階５１９）

9:00-9:35

１．長澤勢理香（同志社大学）　　司会:児島　秀樹（明星大学）

「王立アフリカ会社のエージェンシー問題」

9:40-10:15

２．青柳かおり（大分大学）　　司会:松園　伸（早稲田大学）

「18 世紀における奴隷の教育と海外福音伝道協会」

10:20-10:55

３．金崎　邦彦（早稲田大学・院）　　司会:薩摩　真介（広島大学）

「ナポレオン戦争後におけるイギリス海軍の強制徴募をめぐる議論」

11:00-11:35

４．春日あゆか（京都大学・研究員）　　司会:岩間　俊彦（首都大学東京）

「19 世紀初頭イギリスにおける煤煙問題と対立する言説の形成」

11:40-12:15

５．正木　慶介（早稲田大学）　　司会:青木　康（立教大学）

「19 世紀初頭イギリスにおける地方政党政治

―リヴァプールにおける市長選挙を事例に―」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１２：１５

◆近代史部会２（西校舎１階５１７）

9:00-9:35

１．稲垣　春樹（キングズ・カレッジ・ロンドン・院）

司会:近藤　和彦（立正大学）

「緊急事態と法の支配
―1820 年代ボンベイにおける東インド会社政府と最高裁の対立とイギリス議会のインド統治改革―」

9:40-10:15

２．西山　喬貴（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン・院）

司会:後藤　春美（東京大学）

「英中通商関係と国際/帝国法の歴史的動態
―1870 年代上海における貿易と通商規則の実践・展開―」

10:20-10:55

３．佐伯　彩（奈良女子大学・院）　司会:大津留　厚（神戸大学）

「1868 年フランツ・ヨーゼフの幻の巡幸とガリツィア領邦議会
―1868 年 9 月 24 日領邦議会決議をめぐって―」

11:00-11:35

４．前田　充洋（大阪市立大学・院）　司会:南　直人（京都橘大学）

「ヴィルヘルム二世治世下ドイツにおける海軍の鉄鋼製品選定
―『供給者目録』の分析から―」

11:40-12:15

５．井出　匠（日本学術振興会）　司会:中澤　達哉（東海大学）

「20 世紀初頭ハンガリー王国におけるスロヴァキア語新聞の展開と機能」

部会別自由論題報告　**５月２２日（日）９：００～１１：３５**

◆現代史部会１（第一校舎２階１２１）

9:00-9:35

１．西　圭介（琉球大学）　　司会:馬場　哲（東京大学）

「自転車部品流通のグローバル化と 1920 年代のドイツにおける自転車部品工業の発展過程―ヘーメルスカンプ社を事例に―」

9:40-10:15

２．髙橋　和雅（専修大学・院）　　司会：中野耕太郎（大阪大学）

「黒人と移民が行き交う日常
―シカゴのニアウエストサイド地域の事例から―」

10:20-10:55

３．貝賀早希子（キングス・カレッジ・ロンドン・院）

司会:等松　春夫（防衛大学校）

「平和のための国際機構？―英国際連盟運動、1914-1918―」

11:00-11:35

４．武井　寛（岐阜聖徳学園大学）　　司会:宮田伊知郎（埼玉大学）

「アメリカ合衆国における制限的不動産約款の廃止と
1948 年シェリー対クレーマー判決」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１２：１５

◆現代史部会２（第一校舎２階１２３）

9:00-9:35

１．山本　耕（明治大学・院）　　司会:川崎亜紀子（東海大学）

「同化 assimilation から適応 adaptation へ

―それを実現しようとしたあるユダヤ系フランス人指導者―」

9:40-10:15

２．山﨑　由紀（敬和学園大学）　　司会:綾辺　昌朋（慶應義塾大学）

「米国海外宣教修道会メリノール会と在米日本人・日系人」

10:20-10:55

３．新谷　崇（東京外国語大学）　　司会:倉科　岳志（京都産業大学）

「イタリアにおけるファシズム体制とカトリック教会の共生（1929-1943）

―聖職者の支持からみる全体主義体制の一側面―」

11:00-11:35

４．水野　祥子（下関市立大学）　　司会:平田　雅博（青山学院大学）

「開発・科学・エコロジー

―1950 年代英領東アフリカの農業開発をめぐる議論を中心に―」

11:40-12:15

５．岩場由利子（日本女子大学・院）　　司会:平野千果子（武蔵大学）

「第五共和政憲法制定過程にみるフランスの植民地政策

―「共同体」成立の経緯を通して―」

部会別自由論題報告　５月２２日（日）９：００～１１：３５

◆現代史部会３（第一校舎３階１３３）

9:00-9:35

１．紀　愛子（早稲田大学・院）　　司会:木畑　和子（成城大学名誉教授）

「ナチスによる「安楽死」をめぐる「過去の克服」

―「ナチの被迫害者」認定問題を中心に―」

9:40-10:15

２．芦部　彰（東京大学）　　司会:北村　昌史（大阪市立大学）

「カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策

―1950 年代におけるキリスト教民主同盟(CDU）の住宅政策から―」

10:20-10:55

３．大下　理世（東京大学・院）　　司会:相馬　保夫（東京外国語大学）

「西ドイツの歴史政策（1969-1974）

―グスタフ・W・ハイネマンと民主主義の伝統―」

11:00-11:35

４．鈴木　健太（東京外国語大学・研究員）　　司会:柴　宜弘（城西国際大学）

「1980 年代末ユーゴスラヴィアにおける大衆運動の展開と構図

―セルビアとスロヴェニアの事例の比較とナショナリズムの再検討―」

ポスターセッション

５月２１日（土）１２：００～１４：００（ポスターセッションタイム）
１２：００～１７：３０（ポスター展示）

５月２２日（日）１２：００～１４：００（ポスターセッションタイム）
９：００～１７：００（ポスター展示）

◆第一会場：西校舎１階５１６
◆第二会場：西校舎１階５１５
◆第三会場：西校舎１階５１２
◆第四会場：西校舎１階５１３

【ポスターセッションについて】

日本西洋史学会大会は、研究に本格的に取り組みはじめたばかりの学部生・院生から中堅・ベテランの研究者、そしてさらには一般の方まで、西洋史学に関心を寄せる多くの人びとが集まる年に一度の機会です。本大会準備委員会は、この貴重な機会が、現在進行中の多様な研究の発信・受信の場としていっそう有益なものとなるためにポスターセッションを設定しました。

ポスターセッションは、比較的インフォーマルで双方向的な学術的コミュニケーションを可能にするフォーマットです。この形式の特徴を活かして、本大会のポスターセッションは、自由論題報告のように新規の研究成果発表に目的を限定しません。研究成果発表以外にも、修士あるいは博士論文の構想あるいは中間経過の報告、科研費等の研究プロジェクトの概要発表あるいは中間報告、萌芽的な研究関心の共有と聴衆との議論を通じた彫琢を目指すプレゼンテーションなど、広範な目的にひらかれています。

以上のねらいを達成するために、本大会におけるポスターセッションは以下のかたちで運営されます。

1. 大会 1 日目 21 日（土）の 11 時頃から 4 会場でポスターの掲示を可能とします。その後 2 日目 22 日（日）の午後まで掲示します。その間、日中はポスター会場を解放していますので（1 日目は 17:30 まで、2 日目は 17:00 まで）、随時ご自由にご観覧ください。なお、掲示期間のあいだ、ポスター報告者がポスター掲示会場に常駐しているわけではありません。

2. 大会 1 日目の 12 時から 14 時まで、大会 2 日目 12 時から 14 時までをポスターセッションタイムとします。この時間帯は、基本的にポスター報告者がポスターのそばで観覧者に説明、対応する時間とします。来場者が一つのポスターに一斉に注目する時間は設定されていません。すべて来場者各自が自由に見て回り、ポスター報告者と、あるいは来場者同士で、議論する時間とします。なお、セッションタイム中でも、ポスター報告者が会場内の他のポスターを見に行くなどしてポスター前から離れている時間がありうる点、ご理解ください。

3. 今回のポスターセッションは研究成果の発表に目的を絞っていないため「優秀ポスター賞」は設けません。

ポスターセッション　**5月２１日（土）・２２日（日）１２：００～１４：００**

（第一会場：西校舎１階５１６）

１．加藤　政夫（学習院高等科）
「世界史教育のゆくえを考える」

２．飛鳥馬一峰（中央大学・院）＋ 功刀俊宏（東洋大学・研究員）
「中近世「首都」における権力―イタリアと日本における事例からの比較―」

３．佐藤　育子（日本女子大学・研究員）
「フェニキア人の海外発展―地中海の事例を中心に―」

４．古川　桂（独立研究者）
「ローマ期エジプトにおける神殿の立地と活用―西方砂漠ハルガ・オアシス―」

５．藤澤　綾乃（慶應義塾大学・院）
「紀元 2-3 世紀の東地中海地域におけるシナゴーグ
―イスラエルとディアスポラを比較して―」

６．柴田　隆功（東京大学・院）
「皇妃アーデルハイト(†999)―オットー諸帝の統治における位置―」

７．林　賢治（早稲田大学・院）
「12 世紀南ドイツの修道院における書庫係」

８．北舘　佳史（中央大学）
「シトー会シルヴァネス修道院の創立史における過去の統合と富をめぐる問題」

９．簗田　航（東京大学・院）
「トリーア大司教ヨハン 1 世の都市統治」

ポスターセッション　**5月21日（土）・22日（日）12：00～14：00**

（第二会場：西校舎1階515）

10. 松本　涼（福井県立大学）
「ノルウェー・アイスランド中世法における人命金（þegngildi）と王権」

11. 佐野　大起（東京大学・院）
「テオドロス・メトキテス『第一皇帝賛美演説』における裁判の記述について」

12. 櫻井　理沙（東京大学・院）
「ラモン・リュイ（ライムンドゥス・ルルス）の異教徒認識とその活動」

13. 窪　信一（東京大学・院）
「14 世紀ビザンツにおけるトマス・アクィナスの翻訳とラテン人観の変化」

14. 濱野　敦史（独立研究者）＋津澤　真代（早稲田大学・院）
「皇帝到来に揺れるトスカーナ―1355 年カール 4 世のローマ行を事例に―」

15. 田中　碧（東京大学・院）
「ドイツ中世都市の召集兵に関する一考察
―とくに 20 世紀初頭以降の軍事史的・都市史的研究に注目して―」

16. 有田　豊（大阪市立大学）
「中世ヴァルド派の思想に関する文献学的研究―写本の分析・解読・校訂―」

17. 槙野　翔（東京大学・院）
「イングランド内戦期アイルランド反乱被害者供述による他者像構築」

18. 早津　光子（明治大学・院）
「マリア・テレジア統治下のハプスブルク君主国における権力構造
―宮廷と官僚の政治的権力をめぐって―」

ポスターセッション　5月２１日（土）・２２日（日）１２：００～１４：００
（第三会場：西校舎１階５１２）

19. 山王　綾乃（お茶の水女子大学・院）
「18 世紀後半の「境界科学」
―パリ王立科学アカデミーから見たカンパーの顔面角理論―」

20. 田中　佳（徳島大学）
「ルーヴル宮共和国美術館開館時の展示―1793 年 8 月 10 日―」

21. 齋藤　由佳（東京大学・院）
「グリモ・ド・ラ・レニエールの美食」

22. 楠田　悠貴（東京大学・院）
「ルイ 16 世裁判におけるチャールズ 1 世裁判の先例」

23. 小西　正紘（東京大学・院）
「「ピータールーの虐殺」という表象
―19 世紀初頭イングランドの政治社会と急進派の政治文化―」

24. 小風　尚樹（東京大学・院）
「1860 年代中国海域における国際協力体制の再検討
―イギリスの海賊鎮圧の理念と活動を中心に―」

25. 山田　千聡（独立研究者）
「19 世紀イギリスの書く女性と家庭経営―家政書の比較分析を中心に―」

26. 山内　由賀（京都大学・院）
「娘たちは何のために学ぶべきとされたのか
―フランス第二帝政期における女子教育の目的―」

27. 湯浅　翔馬（早稲田大学・院）
「フランス第三共和政初期のボナパルト派の展開
―ジュール・アミーグとポール・ド・カサニャック―」

ポスターセッション　**5月21日（土）・22日（日）12：00～14：00**
（第四会場：西校舎1階513）

28. 宮原　愛佳（上智大学・院）
「19 世紀プロイセンの社会問題に対する自由主義者の主張
―企業家 F・ハルコルトを事例に―」

29. 志賀　吉修（愛知大学・研究員）
「イギリスの 19 世紀におけるエジプト政策
―特にグラッドストン第２次自由党内閣のエジプト単独占領（1882 年）を中心に考察―」

30. 丸山　雄生（一橋大学）
「第一次大戦期アメリカの保存イデオロギー
―総力戦と博物館の展示技術の関係について―」

31. 鈴木　俊弘（一橋大学・院）
「アメリカ合衆国における移民とコーポラティブ・アパートメント運動
―フィン系移民と Alku / Alku Toinen の事例から―」

32. 阿部　竹浩（東北大学・院）
「1920 年代後半から 30 年代における在英インド人の独立運動
―インド連盟を中心として―」

33. 尾﨑　永奈（東京大学・院）
「「知識の人間化」をめぐる編集哲学―1920 年代アメリカ出版文化の一側面―」

34. 西崎　緑（福岡教育大学）
「公民権運動における NCNW の役割」

小シンポジウム１～４　５月２２日（日）１４：００～１７：１５

小シンポジウム１　代表：甚野　尚志（西校舎２階５２６）

「長い「宗教改革」か？ 長い「中世」か？
―ヨーロッパ中近世の教会改革と社会―」

司会・趣旨説明：甚野　尚志（早稲田大学）

報告１：大貫　俊夫（岡山大学）
「改革修道制におけるカリスマと文書主義
―シトー会と隠修士運動をめぐる一試論―」

報告２：図師　宣忠（近畿大学）
「異端審問官＝托鉢修道士による情報伝達
―審問記録の作成・利用・管理をめぐって―」

報告３：踊　共二（武蔵大学）
「宗教改革・人文主義・中世思想
―ラディカルリフォメーション研究の視点から―」

コメント：印出　忠夫（聖心女子大学）

コメント：根占　献一（学習院女子大学）

小シンポジウム１～４　５月２２日（日）１４：００～１７：１５

小シンポジウム２　代表：楠　義彦（西校舎２階５２８）

「魔女研究の新潮流
―メディア、領域侵犯、グローバル・ヒストリー―」

趣旨説明・司会：楠　義彦（東北学院大学）

報告１：田島　篤史（関西大学）
「中・近世帝国都市ニュルンベルクにおける魔女・メディア・悪魔学」

報告２：黒川　正剛（太成学院大学）
「表象としての魔女」

報告３：谷口　智子（愛知県立大学）
「表象と媒介者―アンデスの悪魔・魔術師・魔女―」

報告４：牟田　和男（ザールラント大学）
「近現代の魔女言説とフェミニズム」

コメント：小林　繁子（新潟大学）

コメント：川田　牧人（成城大学）

小シンポジウム１～４　５月２２日（日）１４：００～１７：１５

小シンポジウム３　代表：小澤　実（西校舎１階５１７）

「グローバリゼーションのなかで歴史を書くこと ―近代歴史学思想へのトランスナショナル・アプローチ―」

趣旨説明：小澤　実（立教大学）

司会：西山　暁義（共立女子大学）

報告１：藤波　伸嘉（津田塾大学）
「法の歴史、イスラームの歴史
―イブラヒム・ハックにみる近代オスマンの歴史叙述―」

報告２：小澤　実
「平泉澄と西洋学知―「皇国史観」以前の平泉中世論再考―」

報告３：工藤　晶人（学習院女子大学）
「地中海史という構想―ブローデルとその後―」

コメント：金澤　周作（京都大学）

コメント：西山　暁義（共立女子大学）

小シンポジウム１～４　５月２２日（日）１４：００～１７：１５

小シンポジウム４　代表：小野塚知二（西校舎１階５１９）

「デジタル資源を活用した資料の共有化と
これからの西洋研究への展望」

趣旨説明：小野塚知二（東京大学）

報告１：小島　浩之（東京大学）
「日本におけるデジタル・アーカイブの動向と課題」

報告２：永崎　研宣（人文情報学研究所）
「デジタル・ヒューマニティーズの動向と課題」

報告３：森脇　優紀（東京大学）
「デジタル・ヒューマニティーズを活用したアダム・スミス文庫研究」

報告４：高橋　裕史（苫小牧駒澤大学）
「1781 年アダム･スミス蔵書目録公開への課題と展望
―ラテン語蔵書を中心に―」

コメント：深貝　保則（横浜国立大学）

コメント：松尾　弘（慶應義塾大学）

司会：大澤　耕史（東京大学）

〈公開講演要旨〉

２０１６年5月２１日（土）１４：３０～１７：３０（西校舎１階ホール）

木畑　洋一（成城大学教授）

「近現代世界とヨーロッパの位相」

鈴木　董（東京大学名誉教授・トルコ歴史学協会名誉会員）

「イスラムの衝撃と近現代西欧」

司会　大森雄太郎（慶應義塾大学教授）

清水　明子（慶應義塾大学准教授）

〈公開講演要旨〉

近現代世界とヨーロッパの位相

木畑　洋一

現在、ヨーロッパはきわめて深刻な危機に直面している。ユーロ危機の余波はまだ残っているし、シリアをはじめとする中東やアフリカなどの諸国から大量に押し寄せる難民の流れに対して各国がまとまった対応をとれずにいるなかで、排外主義的な主張をかかげる政治勢力が至るところで台頭し、テロの続発が人々の不安感を深めている。こうした状況を前に、西洋史学会に参集した私たちは、自分が研究対象としているヨーロッパとは一体何なのか、と改めて問いかけてみる必要があるのではないだろうか。もちろん、ヨーロッパとは何かという問いに対する答えは一様ではなく、私たちが抱くヨーロッパ像がそれぞれの問題意識や視座によって異なってくるのは、当然である。本報告では、以下のような形で報告者にとってのヨーロッパ像を提示することによって、議論の素材としてみたい。

まず問題としたいのは、現在の姿に通じるヨーロッパというまとまりについての意識が生まれてきたのはいつ頃かという点であり、そうした意識の浮上を促した「他者」についても検討する。18 世紀後半以降、このヨーロッパ意識は「文明」の担い手としての色彩を色濃く帯びるようになるが、「文明」が「文明化の使命」論や「文明の標準」論という形をとって植民地支配と結びつきながらヨーロッパの姿を規定していった点を、次に論じていきたい。この「文明」は、現実にはヨーロッパ内外での多様な差別や暴力によって支えられていたわけであり、それについても触れることにする。さらに、こうしたヨーロッパに、元来そこから派生した国である米国やオーストラリアなどがどう関わったのか、また日本の関わり方はどうだったのかという点にも言及する。そして最後に、このようなヨーロッパの姿がヨーロッパ統合の過程にいかに反映されたかを述べた上で、将来についての簡単なコメントを加えることにしたいと考えている。

〈公開講演要旨〉

イスラムの衝撃と近現代西欧

鈴木　董

今日、欧米では、「イスラム過激派という妖怪が徘徊している」かにみえる。かつて、「共産主義という妖怪が徘徊している」かに感ぜられたように。しかし、共産主義は、自らの鬼子であったが、イスラムの衝撃は異文化圏内からの脅威にみえる。西欧人が原動力とする唯一のグローバル・システムとしての近代世界体系形成以前、相対的に自己完結的な諸文化世界が並立し、可視的にはラテン文字世界としてとらえうる西欧キリスト教世界とアラビア文字世界としてのイスラム世界もその例であり、両者の力関係は7世紀後半より、海上では15世紀末まで、陸上では16世紀末まで、東高西低であった。しかし、17世紀末以降、イスラム世界は「西洋の衝撃」にさらされつつグローバル・システムに包摂され始め、イスラム圏と化した。「西洋の衝撃」に対し、西洋化改革が進められ始め、その流れの中で、アイデンティティーと統合・共存の基軸も宗教から民族へとシフトし、20世紀の４分の３は、世俗的民族主義者のヘゲモニーの時代であり、巨大な社会変動が進行した。都市化の進行、都市の旧中間層の二極分化、新スラムと新貧民の急増がアノミーをもたらし、イスラム・ベースの世直しプランが人々をひきつけ始めた。その結果、近世的インフラが弱いうえに格差の極大化したイランでは、イラン・イスラム革命が起った。近世的インフラの比較的強いトルコでも、穏健ながらイスラム主義政権が成立し、エジプトでも「アラブの春」の中でムスリム同胞団出身の大統領が登場した。内外状況が苛酷なところでは、イスラム主義も過激化し、パレスティナのハマス、ソ連進攻下のアフガニスタンのタリバーンとアル・カイーダの源流、イラクそしてシリアの液状化の中で、「イスラム国」が登場した。とりわけ、9・11以後の一連の動きは、欧米人にとり異文化世界からの「イスラムの衝撃」にみえる。しかし、その原因は、主として対外的には米ソの行状、対内的には、欧米における差別と格差に帰せられるところが大なのである。

部会別自由論題報告要旨

２０１６年5月２２日（日）９：００～１２：１５

◆古代史部会　（西校舎３階５３２）
◆中世史部会　（西校舎２階５２７）
◆近世史部会１（西校舎２階５２８）
◆近世史部会２（西校舎２階５２６）
◆近代史部会１（西校舎１階５１９）
◆近代史部会２（西校舎１階５１７）
◆現代史部会１（第一校舎２階１２１）
◆現代史部会２（第一校舎２階１２３）
◆現代史部会３（第一校舎３階１３３）

〈古代史部会〉

ローマ帝政期の製粉所・製パン所における労働

反田　実樹

小麦は、古代ローマ帝国に生きる人々の主要な食べ物の一つであった。小麦を食すためには、製粉作業を経た後、粥やパンに加工しなければならない。人々の食生活を支えた pistrinum（製粉所・製パン所）での仕事は、必要不可欠でありながら過酷な肉体労働であった。紀元後 2 世紀にアプレイウスが著した小説『黄金のロバ（変身譚）』には、ある pistor（製粉業者・製パン業者）が経営する製粉所・製パン所の様子を子細に記した場面が出てくる。この製粉所・製パン所の現場労働者たちは、「額に文字を刻まれ、頭髪を半分剃られ、両足を鎖に繋がれて」いた（第 9 巻第 12 章）。彼らの身体描写は、後 1 世紀のペトロニウスの『サテュリコン』やコルメッラの『農業論』が伝える ergastulum（労役所）の囚人の姿を彷彿とさせる。本報告では、史料に散見される現場労働者の姿と製粉・製パン作業の様子を描いた浮彫を比較しつつ、製粉所・製パン所で行なわれていた作業や労働環境について考察したい。

公共建築物造営にみるローマ帝政前期小アジアの都市社会
―エフェソスを中心に―

増永　理考

帝政前期ローマにおいて最も繁栄していた地域の一つに数えられる小アジアでは、都市有力者らによる恩恵施与行為が増大したことが知られている。従来、かかる現象は、都市において寡頭的支配を目指す有力者個人の枠組みの中でしか語られてこなかった。それゆえ、関連する碑文の中で、恵与の対象としてしばしば都市共同体の名が言及されることがあっても、それは有力者が権力獲得を正当化するための「ヴェール」とみなされてきたのである。

しかしながら、近年、一部の研究者が示唆するように、恵与行為は都市の公的組織との交渉を要したがゆえに、それは単に有力者自身のみならず、都市共同体そのものにとっても重要な問題だったのである。したがって、本報告では、かかる恵与行為に対する都市の関与を、小アジア西岸のエフェソスにおける公共建築物造営事業を例に、碑文史料、文学的史料を組み合わせつつ考察し、近年見直されつつある帝国支配下におけるギリシア都市社会の実態に迫ることを試みる。

〈古代史部会〉

文字史料 vs. 考古資料
—オスティア・アンティカ「七賢人の部屋」を例として—

奥山　広規＋向井　朋生

オスティア・アンティカ遺跡を代表する遺構「七賢人の浴場」の一室である「七賢人の部屋」は、オスティア随一の壁画と豊富な文字情報を誇り、同遺跡の基本的史・資料として大いに注目されてきた。ところがその用途については、1936 年の発掘以来、種々の仮説が提示されてきたものの未決着のままである。

実際、奥山と豊田浩志は、文字史料、すなわち壁画に記されたワイン銘柄 Falernum と奥山によって昨年新たに判読されたワイン銘柄 Mamertium に基づき、この部屋はワイン販売を主体としたタベルナ、あるいはワイン問屋であったと考えるが、向井は、壁面に描かれたアンフォラの型式学研究から、描かれたアンフォラをオリーブ油用と魚加工品用であると判断し注意を喚起している。

従って、奥山と向井による本報告は、「七賢人の部屋」の総合的研究の一助となると同時に、本報告を通じて、過去を考察する二大巨頭である文字史料と考古資料のすり合わせを目指し、相互理解を深めたい。

帝国支配におけるウェスタの神女

遠藤　直子

１世紀、ユリウス・クラウディウス朝時代に在職したウェスタの神女（みこ）のうちアテナイにおいて顕彰された者たちがわずかながら確認されている。その者たちおよびその男性親族のパーソナル・データを精査することにより、当時属州アカイアの一都市に収束したアテナイがどのようにローマの支配を受け入れ、生き延びを図ったのかを分析し、ひいては “ローマ的なもの” が帝国各地に伝播するいわゆる「ローマ化」に関して、近年の研究動向に倣い、中央から地方へという一方的な流れに限らず、ローマ流が “現地流” と習合していくという視点を重視し、「ローマ化にして現地化」ともいうべき相互的な状況を明らかにすることを目的とする。

同時に本報告は、ウェスタの神女およびアテナイに関して、それぞれ先行研究における “空白部分” を解明する試みでもあると考えている。

〈古代史部会〉

カエサレアのエウセビオス『教会史』８巻における目撃情報

大谷　哲

カエサレアのエウセビオスの主著『教会史』第８巻９章には、４世紀初頭のいわゆるキリスト教徒大迫害期に、著者がティルス、テーベで目撃したとされるキリスト教徒迫害の模様が描写される。しかしながら同箇所と関連史料を比較検討すると、同箇所は著者自身の単純な目撃証言ではなく、過去のキリスト教徒殉教録史料などに現れるモチーフを用いて構成されていることがわかる。古代地中海世界の歴史叙述において、目撃者証言は歴史書の信憑性を確保するのに最も重要視される要素であった。それゆえ各歴史家たちは、自身や他者の目撃情報、あるいは目撃証言に基づく歴史書を執筆時に叙述に組み込み、また目撃情報に基づくことを強調して、自らの歴史書の価値を高めようと尽力した。本報告では、エウセビオスもまたこうした歴史叙述の方法論に則り、入手したティルス・テーベ迫害に関する諸情報を、自らの目撃情報だと主張しつつ、彼が構想する理想の殉教像を描くために配置したことを明らかにしたい。

〈中世史部会〉

13-14 世紀における二つのシチリア王国と港湾行政
―港からみた王権の地方統治―

高橋　謙公

中世シチリア王国は地中海世界の中心に位置し、その海上交通の要所とされる。Ｐ・ホルデンは、地中海世界は「文字通り多くの国際的な不安や論争が集約される場所」とする。昨今地中海史家の間で、こうした「グローバル」な地中海交流史を描く際、拠点となる島嶼、特に各航路を中継するシチリアの港の重要性が注目される。すなわち為政者に航路管理をもたらす港の管理が、地中海世界の様々な政治的、経済的折衝に関わる重大な要素としているのである。その際に多くの研究者は為政者による港湾管理の影響力を前提に議論を進める。しかし一方で王国の地方自治を巡る議論では「シチリアの晩禱事件」が王国各地に地方自治獲得を求める動向を加熱させたとする。その状況下で、シチリア王がいかに港の管理に向き合ったかを問うことは、今日指摘される港の重要性を裏付けることになるだろう。そこで本報告では、王権の地方統治という文脈で、13 世紀－14 世紀における王権の港の管理、すなわち港湾行政について明らかにしたい。

14 世紀スコットランドにおける限嗣相続の発展
―ブルース朝の王証書の分析を通じて―

坂下 拓治

本報告はスコットランドでの限嗣相続 entail の出現とその背景を扱う。限嗣相続は、近代まで続く大規模土地所有を可能にした要因の一つになったと言われている。古今東西、富のある人々にとって自らの財の行く末は重要な関心事であった。中世ヨーロッパでは「領主制」的なあり方の進展とともに、相続の慣行は概して長子相続へと傾いていった。このような領主側の都合だけでなく、女子や長男以外の男子への相続といった、原則のみでは解決できない多様な社会的・政治的要求も存在した。そのような要求が文書に示されることで、目に見えるようになってきたのが限嗣相続の始まりであると言えよう。スコットランドでは 13 世紀半ばころから王の証書に特定の相続の仕方の規定が現れ始め、14 世紀のブルース王朝になりその数が著しく増加した。発給する王側の理由と受領する側の理由を考察し、この背後にある社会・政治・保有から生じる要因に、さらには、その後の王と有力者との関係への影響に一つの説明を与えたい。

〈中世史部会〉

15 世紀イングランド王権における予言
―ヘンリー４世をめぐって―

宮城満里奈

プランタジネット家のリチャード２世が廃位された後に、王位を継いだランカスター家のヘンリー４世には王位簒奪のイメージがつきまとった。ランカスター家は、そのイメージを払拭し、ヘンリーの即位を正当化するために、ヘンリーの血統を示す予言を利用した。

イングランド王位を正当化する予言は、ジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王伝』を端緒とし、以降の王位の継承においても大きな意味を持った。ランカスター朝成立期には、詩人や年代記作家によって予言が書かれた。その一方で、ヘンリーに対する反乱の中心人物であるオーウェン・グリンドゥルや、モーティマー家らも予言に言及した。

本報告では、ヘンリー４世の即位からおよそ 10 年間に書かれたとされる予言がどのように王位の正当化に利用され、一方で、どのようにヘンリーと対立する陣営で用いられたのかを考察したい。

写本から初期印刷本への移行
―*The Temple of Glas* を中心に―

足立　峻一

ベネディクト会修道士であり、Chaucerian の一人としても知られている John Lydgate（c. 1371–c. 1449）の作品の一つに *The Temple of Glas* という夢の中での出来事を描いた恋愛寓意詩がある。本作品の写本や印刷本が数多く残されていることから、当時の人気を窺い知ることができる。*William Caxton and Early Printing in England* の著者である Lotte Hellinga（2010）によると、William Caxton が印刷業を始めた際に印刷出版した「初期四折判」と称されているものがある。その中の一つに Lydgate が執筆した本作品がある。Caxton がどの写本を基に活版を組み、印刷をしたのかということについては各研究者によって意見が分かれているため、議論の余地が残されている。そこで本報告では、Caxton が写本から印刷本にする際にどの写本を参考にしたのか、またどの写本により近いのかを再検討し明らかにしたい。また、編集過程でどのような言語的な変容や正字法上の動向があるのかを分析する。

〈中世史部会〉

11 世紀イングランドにおける塩の生産と流通

鶴島　博和

塩は調味料、バターやチーズ作り、肉や魚の保存、皮の鞣しなどに用いられた生活の必需品であった。11 世紀のイングランドには、その精製方法の違いによって二つの製塩地帯が存在した。北海に面したリンカンシャから英仏海峡に面したコンウォールまでの海域に広がる海水を原料とした海浜製塩地帯と、内陸部チェシャやウースタシャのドロイトウィッチの塩井戸の湧水を原料とした湧塩水地帯である。本報告では、この二つの地帯の差異性を前面に押し出しながら、製塩地の地理的位置、具体的な製塩方法とその権利関係、製塩所の構造、製塩人の社会的存在形態、森林や泥炭地といった燃料供給地のあり方を明らかにし、生産量を推測する。ついで局地的市場圏から広域市場圏へと広がっていく生産地からの供給システムを、当時の推定される水陸の交通網と手段を視野にいれつつ明らかにする。最後に塩作りが果たした原初的産業複合体での中核的役割や、副産物としての景観形成と想定される間接的な公害に触れる。

〈近世史部会１〉

贖宥状と海外布教
―コロンナ家に発行された天正遣欧使節贖宥状をめぐる問題―

小川　仁

本報告では、スビアーコのコロンナ文書館で発見した手稿の贖宥状、「教皇シスト５世聖下の聖性より認可されし贖宥状 日本大使にして、いとも気高き貴人らに恩寵を授けるロザリオ、十字架、メダリア 1585 年 6 月 2 日」を取り上げ、この贖宥状がコロンナ家に発行された経緯及び、贖宥状とローマ・カトリックの海外布教の関わりについて考察する。当該贖宥状は箇条書きに 12 項目で構成されており、「ミサで日本の改宗のため祈祷せし者、煩悩にまみれた魂が清められよう」といった項目が含まれている。パウルス５世が認めた手稿の贖宥状（コロンナ文書館蔵）にも、「フィリピンでの改宗を祈祷すれば、贖宥が得られる」といった記述が認められるため、スペインの海外進出とコロンナ家、ローマ・カトリックとの関係を視野にいれ、イエズス会や托鉢修道会らの日本布教と関連付けつつ、「異教の地における布教成功の祈祷が上記二つの贖宥状に組み込まれるに至った経緯」を解明することが、本報告の最大の目的である。

近世教会国家体制下におけるローマ都市政府の Terre del popolo 統治

原田亜希子

15 世紀以降、積極的に世俗統治に乗り出した教皇によって形成された「教会国家」は、近世イタリアを形成する重要な要素であり、その国家のあり方をめぐって様々な研究がなされてきた。特に都市ローマに関しては、教会国家の首都として、他の都市と比べて教皇による統治が強化されていく一方で、伝統的都市政府も存続していたことから、両者の関係を実証的見地から考察する試みがなされている。しかしこれらの研究は教皇とローマ都市政府との関係をもっぱら市壁内に限定してきた。だが都市政府の統治領域は実際には市壁外にも広がり、またローマ近郊には都市政府に参加することは出来なかったとはいえ、依然としてローマに強い影響力を行使する伝統的封建貴族層の領土も存在した。そこで本報告では、ローマ都市政府が伝統的に支配権を持つローマ近郊の４つの従属共同体 Terre del popolo に注目し、市壁外での都市政府の活動を考察することで、教皇庁、都市政府、そして伝統的封建貴族層という近世ローマを構成する諸要素の関係が、市壁外ではどのような形で展開したのかを明らかにすることを目指す。

〈近世史部会１〉

ジョン・ノードゥン『測量査定士の対話』考
―「プロフェッション」概念の観点から―

高橋　裕一

近代初頭イングランドは、いくつかの専門職(profession)が徐々に形成された時期である。農村社会においても、領主の下でマナー、エステイトのマネジメント実務を担うスタッフは役割分担が次第に進むが、そのなかで法律職に続いて高い専門職能を発揮していくのが、有力な外部スタッフたる測量査定士(surveyor)であった。16 世紀末から 17 世紀にかけて活動したジョン・ノードゥンの著『測量査定士の対話』(初版 1607 年刊)は、広く当時の農業事情が窺える重要文献として知られるが、自ら従事する測量査定士の業務内容や役割などを詳細に伝え、その専門職としての特性や問題点を明確に示した点で注目に値する。本報告では、測量査定士の業務手引きなどに関連する 16 世紀後期の若干の著述、およびノードゥンのそれとほぼ同時代に刊行され、ほとんど言及されてこなかったトマス・クレイの冊子、その他の記述とも対比しつつ、農業史ではなく専門職形成の観点から、この文献資料に新たな考察を加えたい。

フェリペ４世の財政改革期ペルー副王領における教会と国家
―リマ市聖堂参事会による十分の一税の運営をめぐって（1639-1648 年）―

佐藤　正樹

フェリペ４世（在 1621-1665 年）治世下のスペイン帝国は、深刻な財政難とそれに伴う政治危機に悩まされた。状況打開のために導入された財政改革が、帝国の各地で暴力的な反応を招いたからである。そんな中、比較的静穏を保っていた地域の一つにペルー副王領がある。本報告では、スペイン王室の財政改革をめぐって、同副王領の首府リマで生じていた世俗権力と教会の対立について論じる。歴史家たちは、ペルーの教会はフェリペ４世の改革に対して協力的であった、と指摘してきた。そこで、改革の要石とされる政策、ウニオン・デ・アルマスに対するリマ大司教座の協力の実態について明らかにするために、ペルー副王・リマ市聖堂参事会の言説、および十分の一税の運営状況を検討し、従来の理解について修正を試みる。

〈近世史部会２〉

17 世紀末フランスにおけるポリスと宗教
―ジャン・ドマ『公法論』を中心に―

谷田　利文

18 世紀初めのフランスで、ドラマールの『ポリス論』に集大成された統治の技法としてのポリスは、1750 年代からの穀物取引論争において、フィジオクラット等によって批判された。しかし、この自由と統制の問題は 17 世紀末にも論じられ、ともにジャンセニスムの影響下に、ジャン・ドマはポリスを論じ、ボワギルベールは市場の自律的秩序を示した。ドマは「法論」で、人間の堕罪後、むしろ労働と商業の必要性が増したとし利己心を肯定する。しかしドマは社会秩序が自動的に維持されるとは考えていない。心など人間の内部を扱う宗教の精神と、人間の外部である社会秩序の維持を担うポリスの精神が統治においては必要だとされる。そして『公法論』では、より具体的に、交通や宗教等についてのポリス規制が論じられた。ボワギルベールとドマの比較、つまり政治経済学とポリスの関係を考察すること、またドラマールとの比較によって、統治の歴史の中でのドマの位置づけを示すことが本発表の目的である。

イエズス会士フランツ・ラング（1654–1725 年）の演劇論
―演劇関係の史料とドイツ語圏の近世史研究の可能性―

大場はるか

ドイツ語圏の近世史研究はユルゲン・ハーバーマスの「公共圏」の理論に加え、学科の壁や文学・演劇学の動向に影響され、イタリア、イギリス、フランスといった国を対象にした歴史学研究とは異なり、演劇にはこれまでほとんど言及してこなかった。そのため本報告は、歴史学において分析する価値のあるドイツ語圏の演劇関係の史料の中から、南ドイツで活躍したイエズス会士フランツ・ラングの演劇論を選び、これを紹介しつつ演劇関係の史料がドイツ語圏の近世史研究に今後どのように活用され得るかを示していく。

ラングの演劇論は 1727 年に刊行された。この著作はイエズス会劇の指導法・演技法に関する最も重要な著作とみなされている。彼はこの論稿を、少年の頃イエズス会劇を自ら演じた経験のみならず、教師として長年この劇を執筆し、上演に向けて生徒を指導した経験をもとに記した。このため、ラングの論稿は彼が生きた時代のイエズス会劇の実態を示す史料として今日まで高く評価されている。

〈近世史部会２〉

啓蒙期フランスにおけるフリーメイソンと善行
―ボルドー「フランス」会所によるアルジェの奴隷救出の事例から―

田瀬　望

1781 年３月１日、ボルドーの「フランス」会所は、アルジェでムスリムの奴隷となった元オランダ軍将校フィッシャーの身代金支払いのために、国内のメイソンに醵金を呼びかけた。フィッシャーはフリーメイソン会員であったとはいえ、フランスの会所や統轄団体に所属していなかった。何故、「フランス」会所は、遠隔地にいる面識のない外国人に対する連帯に立ち上がったのだろうか。本報告では、この会所が通信会所と交わした書簡や集会記録などの史料に依拠しつつ、この問題をローカル・ナショナルなフリーメイソン史の展開に位置付けながら検討したい。その際、小教区教会や兄弟団を枠組みとするキリスト教的慈善や、1760 年代以降、啓蒙哲学者によって称揚された世俗的博愛主義と比較することで、18 世紀フランスのフリーメイソンによる善行の特質を明らかにしたい。

啓蒙の世紀フランスにおける外国人遺産没収権
―パリ・サン=ジェルマン=デ=プレ地区における実施の事例から―

見瀬　悠

近世フランス王国では、外国人の法的地位は相続上の無能力によって定義された。国王は王国内でフランス人の相続人を残さずに死亡した外国人の財産を外国人遺産没収権によって接収できた。この国王大権は 18 世紀後半になると通商条約により互恵的な免除が進んだが、1789 年に憲法制定議会によって廃止されるまで外国人を臣民から区別する法的指標として存続した。本報告ではパリ・サン=ジェルマン=デ=プレ地区における適用事例の分析から、シャトレ裁判所付き警視が実施する外国人遺産没収権の手続きとその論理、適用を決定する王領法廷の国王検事の意図や利害を明らかにし、王令や法学者の判例解釈から成る法規範、対象となる個人の社会的属性とどのような関係にあったのかを検討する。それにより、近代的国籍の成立以前に国家によって課された外国人の法的範疇が、どのような意味を持ち、どのような機能を果たしたのかを明らかにしたい。用いる史料はシャトレ裁判所付き警視が作成した死後財産封印調書や法学者の著作、関連する王令などである。

〈近世史部会２〉

18 世紀ロシアにおける貴族
―ヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーキーを手がかりに―

鈴木　佑梨

ロシアにおける 18 世紀は、ピョートル 1 世による改革によってヨーロッパにおける国際的立場を急速に強化した時代である。一方、彼の死後からエカチェリーナ２世の即位までは宮廷クーデターが頻発し、改革に逆行する「暗黒の時代」として長らく否定的に評価されてきた。近年では 18 世紀全体を長期的な改革の時代として位置づける傾向が現れているものの、依然としてこの「暗黒の時代」に関してはあまり研究が行われていない。しかし、このような不安定な時代において実質的な統治を担った貴族の政治的実態と国家の統治形態を明らかにしないことには、近世ロシアの特質を考えることは不可能であると思われる。そこで本報告では、エリート貴族ヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーキー公に関する公文書などの分析から彼の政治的実態を明らかにし、当時の貴族の一例として提示する。そしてピョートル死後のロシアの統治形態を再検討し、どのように専制が維持されていたのかということを明らかにしたい。

〈近代史部会１〉

王立アフリカ会社のエージェンシー問題

長澤勢理香

本報告は、イギリス王立アフリカ会社（Royal African Company、以下 RAC）のエージェンシー問題のうち、RAC ロンドン本部と西インド諸島在住のエージェント間に見られたプリンシパル＝エージェント関係に焦点を当て、同社が抱えていた問題点を明らかにする。

すでに 18 世紀にアダム・スミスが『国富論』で類似の概念に言及しているように、いつの時代にも営利組織にはエージェンシースラックは発生する。ロンドンに本部を置き、三角貿易の第２頂点にあたる西アフリカに奴隷調達拠点を、そして第３頂点にあたる西インド諸島には奴隷販売拠点を配置していた RAC もその例外ではない。長距離貿易はモニタリングがおろそかになりやすいことから、そこで生まれた情報の非対称性は本部から離れて活動するエージェントによる不正行為のリスクにつながった。本報告では RAC の契約とモニタリングを考察し、そのエージェンシーコストを議論する。

18 世紀における奴隷の教育と海外福音伝道協会

青柳かおり

1701 年、イングランド国教会の公式布教団体である海外福音伝道協会（the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG と略記）が設立された。SPG の主要な目的は植民地の人々にキリスト教を布教することであった。イギリス人入植者の司牧だけでなく、先住民とアフリカ系奴隷に布教していくことも重要な課題であった。本報告では SPG の奴隷への布教や教育活動を取り上げる。SPG は白人だけでなく黒人のために学校教育を行った。彼らに英語を読むことを教え、聖書を読めるようにした。また教理問答も教え、十分に理解できた奴隷を改宗させようとした。特にニューヨークとサウスカロライナの黒人学校は成功したと思われる。しかし、主人たちは奴隷への教育や布教には様々な理由で反対していた。教育に労働時間を取られ、奴隷が高慢で怠け者の悪い奴隷になると考えられた。本報告では聖職者の著作、宣教師による報告書等の史料を用いて、SPG の奴隷への教育活動の意義を考えたい。

〈近代史部会１〉

ナポレオン戦争後におけるイギリス海軍の強制徴募をめぐる議論

金崎　邦彦

本報告は、ナポレオン戦争終結後から水兵志願奨励法が制定された 1835 年にかけての、イギリス海軍の強制徴募をめぐる議論を分析することを目的とする。強制徴募は、ブリテン海軍が行っていた人員徴集方法の一つで、時に暴力を伴う乱暴な手段であった。戦争中には人員配備に余裕がなかったため十分に議論されなかったものの、ナポレオン戦争後に強制徴募をどうするか検討しようという機運が広まった。その結果、議会内外で急進的な思想や奴隷制廃止の論理を利用した強制徴募批判がなされるようになった。近年、特に欧米において強制徴募の研究は盛んだが、いずれも「長い 18 世紀」の戦争中における強制徴募の分析に集中しており、ナポレオン戦争後の議論については研究が乏しいうえに海軍史の文脈にとどまっている。そこで、本報告では、当時の政治状況や社会状況をも考慮しつつ、強制徴募をめぐる議会内外の議論を分析することで、強制徴募の言説と奴隷制廃止や急進主義の思想との関連性を明らかにしたい。

19 世紀初頭イギリスにおける煤煙問題と対立する言説の形成

春日あゆか

英国で最初の全国的な煤煙対策の法律は、1821 年に成立した「蒸気機関炉からの煙害訴訟促進法（1821 年法）」である。この法律を受けて一部の工場経営者は煤煙対策技術を導入した。本報告では新技術を導入しようとした産業界が直面した問題について明らかにする。その際、新技術を導入する選別コストや手間についての認識が新聞などで広まった一般的な認識と異なったものになった経緯について注目する。史料としては、蒸気機関を揚水のために使用していたイーストロンドン水道会社の議事録を利用する。イーストロンドン水道会社は、1821 年法に先駆けて教区から煤煙に関する苦情を寄せられており、法案審議で取りざたされていた煤煙対策技術のうち最も効率のよい装置を導入すべく、数年にわたって調査を行った。この調査は他の水道会社や工場と比べても包括的なものであり、新技術を評価することの困難さを明らかにする。しかしこの困難さは新聞などではほとんど取り上げられることはなく、新技術について産業界と一般の認識の差が生まれた。

〈近代史部会１〉

19 世紀初頭イギリスにおける地方政党政治
―リヴァプールにおける市長選挙を中心に―

正木　慶介

本報告は、1815 年から 1832 年にリヴァプールで行われた市長選挙を分析することで、これまで研究が不十分であった 19 世紀初頭ブリテンの地方政党政治について考察する。

リヴァプールにおいて市長選挙は市民にとって重要な政治活動の場となっていた。ブリテンの多くの都市では市長選任の権限は市議会議員に限定されていたが、リヴァプールでは、国政選挙同様、約 3,000 名の自由市民（freemen）に市長選挙の投票権が与えられた。また、選挙の直前には非有権者も参加した公的集会がしばしば開催され、党派的な意見が表明された。こうした状況の下、同都市の市長選挙はかなりの頻度で競争選挙となった。

本報告では、主に以下の二点に注目する。第一に、国会とリヴァプールにおける市長選挙では政党対立が顕著となる時期はほぼ重なっており、中央政治と地方政治の間には一定の結びつきが見られた。一方で、第二に、市長選挙で最大の争点となったのは、市議会の代表制という地方的問題であった。本報告は、これらの点を踏まえつつ、地方ホイッグ・地方トーリの両派が地域特有のコンテクストの中で明らかにした政治的態度を考察する。

〈近代史部会２〉

緊急事態と法の支配
―1820 年代ボンベイにおける東インド会社政府と最高裁の対立と イギリス議会のインド統治改革―

稲垣 春樹

近年のイギリス帝国史研究は、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて生じたとされるインド支配の変容―現地のネットワークに埋め込まれた多元的商業帝国から軍事征服と官僚支配に基づく「専制的」領土帝国へ―について、法の支配の制限と緊急事態における例外的措置の制度化に着目する新たな視座を提示しているが、理論的考察にとどまっている。本報告では、1820 年代インド西部ボンベイ管区における東インド会社政府と（東インド会社からは独立した国王裁判所である）最高裁の対立に着目して、この変容の一端を歴史的に明らかにする。まず、第三次マラータ戦争（1817-8 年）後に獲得した新征服領土において政府が取った司法・警察政策の基本方針を概観する。次に、その基本方針が最高裁により脅かされた複数の事例を紹介する。そして、この問題がイギリス本国議会に持ち込まれ、1833 年東インド会社特許法において最高裁に対する東インド会社の優越が規定された過程を検討する。

英中通商関係と国際/帝国法の歴史的動態
―1870 年代上海における貿易と通商規則の実践・展開―

西山 喬貴

19 世紀中葉以降の清朝中国と欧米列強の条約関係は、イギリス帝国史において主要な研究テーマの一つとなってきたが、「不平等条約」に象徴されるような英中関係の政治経済的枠組みの究明は、いまだ大きな研究課題として残されている。この問題に取り組むには、イギリス帝国側のみではなく、中国側の動向や利害関係を踏まえたうえで、条約を中心とした英中国際法関係、そこでのイギリス帝国の在り方を歴史的に再考する必要があろう。そこで、本報告は、国際的ルール、イギリス帝国法、中国の商業慣習が交錯する問題として、通商上の民事紛争の解決手段に着目する。1870 年代前半の上海で先鋭化した中国の主力輸出品たる茶と絹の取引方法を巡る問題を分析することで、通商問題の発生、商業規則と紛争解決手段の展開、さらに条約関係の改定へと至る歴史的過程を明らかにする。これによって、英中法体系のせめぎあい、実地の商業慣行と国際的ルールの関係、そこでの国際法とイギリス帝国法が密接に絡み合った法的実践の歴史的動態が提示されるであろう。

〈近代史部会２〉

1868 年フランツ・ヨーゼフの幻の巡幸とガリツィア領邦議会
―1868 年 9 月 24 日領邦議会決議をめぐって―

佐伯　彩

1867 年 12 月に成立したオーストリアとハンガリーとの間のアウスグライヒ（妥協）は、帝国を形成していた諸王国・諸邦の間での自治獲得運動に大きな影響を与えた。チェコ人議員などは、国会をボイコットするなどオーストリア政府とフランツ・ヨーゼフ一世（以後、フランツ・ヨーゼフとする）の政治的態度について不快感を示した。

さて、こうした状況の中で、帝国北東に位置していたガリツィアの領邦議会の多数派であったポーランド人議員たちも自治獲得への動きを強めていく。彼らは、フランツ・ヨーゼフのガリツィアにおける大巡幸の開始直前に巡幸の延期を打診した。そして、そのかわりに自治獲得に関する領邦議会決議を提出したことで皇帝の不興を買い、結果的に巡幸が撤回されてしまったのである。本報告では、1868 年巡幸撤回の原因となったガリツィア領邦議会 9 月 24 日決議に関する議論をとおして、ガリツィアによる自治獲得への活動の展開について考察する。

ヴィルヘルム二世治世下ドイツにおける海軍の鉄鋼製品選定
―『供給者目録』の分析から―

前田　充洋

19 世紀後半以降ヨーロッパにおける軍隊とくに海軍は、自国における工業技術の発展をふまえ、民間の企業にたいして海軍の要求にかなう製品を製造、提供できる企業とのみ取引するというコマンド・テクノロジーと呼ばれる手法をとるようになった。それは第一次世界大戦前のヴィルヘルム二世治世下ドイツ(1888-1914)でも例外ではない。同時期のドイツ海軍をめぐってはその急激な拡張経緯が注目され、政治史的または社会構造史的な枠組みのなかで従来捉えられてきた。近年では鉄鋼企業との関係形成過程などの社会経済史的側面からも光が当てられているが、関係形成の土台となるコマンド・テクノロジーの様相は具体的には捉えられていない。そこで本報告ではドイツ海軍が購入先企業を選定して作成した『供給者目録 Lieferantenliste』に着目し、予算委員会の議事録や企業との契約書と統合的に分析することで、艦艇建造に必要な鉄鋼製品や購入先企業を海軍がどのように選定していたのかを具体的に明らかにしたい。

〈近代史部会２〉

20 世紀初頭ハンガリー王国におけるスロヴァキア語新聞の展開と機能

井出　匠

20 世紀初頭にハンガリー王国で発行されていたスロヴァキア語新聞には、スロヴァキア国民主義系、政府（自由党）系、カトリック人民党系など、政治的立場の異なる様々な種類のものがあった。このうち『スロヴァキア週報』や『カトリック新聞』などの国民主義系新聞は、スロヴァキア国民主義運動の理念や活動内容を跡づけるための基本資料として、従来のスロヴァキア史研究においても頻繁に参照されてきた。しかし、これらの新聞がスロヴァキア語読者層に、いかにして、またどの程度浸透していたのかという点（展開面）、またその国民主義的な政治言説が読者層の認識的枠組み（フレーム）にいかなる影響を及ぼしえたのかという点（機能面）については、これまでに十分な研究がなされていない。そこで本報告では、スロヴァキア国民主義系新聞の拡大状況について報告した行政資料および、一般読者からの寄稿からなる読者通信記事等を参照しつつ、これらの新聞の展開と機能についての解明を試みる。

〈現代史部会１〉

自転車部品流通のグローバル化と 1920 年代のドイツにおける自転車部品工業の発展過程 ―ヘーメルスカンプ社を事例に―

西　圭介

世紀転換期にアメリカ製、イギリス製自転車との競争を通じてドイツにおいて自転車工業が勃興し、一次大戦前に大量のドイツ製自転車部品がイギリスやフランスのみならず、日本にも輸出された。一次大戦中にイギリスとドイツからの自転車および自転車部品の輸入が途絶したことによって日本において自転車の輸入代替が始動し、1920 年代に大量の日本製自転車部品が中国、蘭領東インドに輸出されることになる。本報告ではこの自転車部品流通のグローバル化について明らかにしつつ、1920 年代に拡大を遂げていたヘーメルスカンプ社（ビーレフェルトに立地）における女性労働者の増加について同社のパーソナルカードを分析することによって明らかにする。

黒人と移民が行き交う日常 ―シカゴのニアウエストサイド地域の事例から―

高橋　和雅

20 世紀初頭のアメリカ合衆国において、シカゴは有数の大都市であった。当時のシカゴは、鉄鋼業や食肉加工業が盛んな産業都市であり、また主要な鉄道が集まる交通の要所でもあった。ゆえにこのシカゴには、経済的な機会を求める多くのヨーロッパ移民が、大西洋を越え、継続的に流入してきていた。

一方国内では、やはり職を求める多くの南部黒人たちが北部のシカゴへと移ってきていた。一般に、彼らの大多数は、巨大な黒人居住区のあるサウスサイドに根づいたとされる。しかし実際には、先の移民の流入地として機能していたニアウストサイドにも、黒人は進出した。よって、このニアウエストサイドでは、貧しい黒人と移民が生活上の協同や折衝をくり返す状況が生まれていた。

しかし従来の研究において、こうした日常的な混在状況が十分に論じられてきたとは言い難い。そこで本報告では、先のニアウエストサイドに流入した黒人が、移民と接触をくり返しながら居住区を築いていった様を検証してみたい。

〈現代史部会１〉

平和のための国際機構？
―英国際連盟運動、1914-18―

貝賀早希子

本報告は、第一次世界大戦中のイギリスにおける国際連盟運動の発展と、国際連盟の知的起源を探るものである。先行研究において国際連盟は、厭戦観の高まりやウィルソン米大統領の政策によって創設されたと考えられてきた。しかし、実際はそれだけではない。1914 年から活動していた国際連盟運動も、国際連盟創設に多大な貢献をしたといえる。一方、その国際連盟運動も、これまで指摘されていたように、平和を求める機運に乗じて発展したものではなかった。大戦中、運動の連盟構想は、敵国・軍国主義に対する民主主義の勝利を求める世論および政治的圧力によって変化を余儀なくされた。なぜこのような変化が起き、どのように国際機構の構想が広く支持されるようになり、実際に国際連盟が創設されるにいたったか。第一次世界大戦時のイギリスで、新国際体制の構想が辿った運命に焦点を当てることにより、国際関係史における理念の力とその限界を明らかにすることが、本報告の狙いである。

アメリカ合衆国における制限的不動産約款の廃止と
1948 年シェリー対クレーマー判決

武井　寛

本発表は、20 世紀前半のアメリカ合衆国において、人種的マイノリティの居住空間を規制する方法の一つとして用いられていた、制限的不動産約款（restrictive covenants）がいかなる過程を経て廃止に至ったのかを考察する。19 世紀末に始まったゾーニングは黒人を「好ましくない人物」と分類し、黒人排除のツールとなっていたが、人種を理由にしたゾーニングは 1917 年に禁止された。1920 年代以降、入居者の人種的・民族的同質性の維持を目的として不動産業者と入居者の間で私的に交わされる制限的不動産約款が用いられるようになった。しかし、この制限的不動産約款も 1948 年の「シェリー対クレーマー判決（*Shelley v. Kraemer*）」によって廃止された。連邦住宅局（FHA）、不動産業者、住宅所有者協会、全米黒人向上協会（NAACP）といった様々な団体が、制限的不動産約款の是非をめぐって争っていた。本発表では、こうした 20 世紀前半のアメリカにおける住宅の人種的排除の技法を明らかにする。

〈現代史部会２〉

同化 assimilation から適応 adaptation へ
―それを実現しようとしたあるユダヤ系フランス人指導者―

山本　耕

フランスは、1930 年代に恐慌の波及をはじめとした国内外の諸要因によって混乱し、1940 年には第二次世界大戦における対独敗北の結果、第三共和政の崩壊を経験した。この時代、反ユダヤ主義の高揚や中東欧からの難民流入をめぐる対立などのために、国内のユダヤ人コミュニティもまた動揺していた。そして、諸問題の解決に向けて奔走していた指導者のひとりが、ユダヤ系フランス人レモン・ラウル・ランベールであった。彼は、官僚や難民支援団体幹部を務める傍ら、ユダヤ人新聞編集長として多数の記事を執筆していた。彼が残した史料には、ユダヤ人コミュニティに対する具体的な提案から、ユダヤ人とは何かという問いかけまで、様々な事柄が記述されている。本報告の目的は、それらを分析し、近代フランス・ユダヤ人史に位置づけることにある。この分析を通じて、彼が 19 世紀以来行われてきたユダヤ人による「同化」のあり方を修正し、「適応」として再構築しようと試みていたことが明らかになるだろう。

米国海外宣教修道会メリノールと在米日本人・日系人

山﨑　由紀

1921 年、メリノール会によって開始された在米日本人・日系人に対するカトリック宣教は、「海外宣教」を目指して創設された修道会の宣教が、アメリカ国内で実施された極めてユニークな例である。このため、同宣教は「国内宣教」（先住民や黒人などの非クリスチャンに対する宣教）の色合いを強く帯びるものとなった。メリノール会員の多くがアイルランド系の司祭・修道士・修道女であったため、日系二世に対する日英両言語による教育は、当時のエスニック・マイノリティであるアイルランド系を中心とするカトリック信徒のアメリカ人によって施されることとなる。

20 世紀初頭のアメリカにおける二つのエスニック・マイノリティの交流が、どのようなアメリカ人を生み出すことになるのか。プロテスタントが主流のアメリカにおけるカトリック教会は、文字通り「普遍の教会」としてのユニバーサリズムを体現する場となったのか。本報告においては、メリノール会による在米日本人・日系人に対する宣教が、宣教対象となった日系二世に与えた影響について論じる。

〈現代史部会２〉

イタリアにおけるファシズム体制とカトリック教会の共生（1929-1943）
―聖職者の支持からみる全体主義体制の一側面―

新谷　崇

本報告は、イタリアのファシズム体制とカトリック教会が様々な問題で衝突を抱えながらも共生し続けた事実に着目し、両者を接着させた要因を社会のレベルから考察するものである。具体的には、教区司祭という、教会位階制の下位に位置し、農村に暮らして信者への司牧を担う、いわばイタリア人の日常生活に最も近い聖職者の存在に注目する。彼らのファシズム体制への支持や協力が結果的に体制と教会の共生状態を下支えしたとの仮説を提示したい。論証では、穀物増産を目的とした体制の農業プロパガンダ「小麦戦争」に、司祭たちが農民を動員し自らも畑を耕して参加した事例を扱う。事業に関わる政府と教会の文書、定期刊行物を主な史料とし、司祭たちの国民意識、小麦戦争参加とファシズム支持の理由、体制側がカトリック界に向け実施したプロパガンダのメカニズムを把握する。以上の作業を通じ、カトリック界の支持なくして「全体主義」たりえなかったファシズム体制の特徴が浮かび上がると考える。

開発・科学・エコロジー
―1950 年代英領東アフリカの農業開発をめぐる議論を中心に―

水野　祥子

第二次世界大戦後のイギリス政府は植民地政策を大きく転換し、植民地開発福祉法の枠組みの下、植民地の経済・社会開発に多額の公的資金を投入するようになった。近年の研究では、こうした開発計画に科学者の果たした役割の大きさが指摘されている。本報告では、主に 1950 年代の英領東アフリカの農業開発をめぐる議論に焦点を当て、植民地科学者がどのような「開発」を構想し、実践したかを考察する。Ｅ・Ｂ・ワージントンら主要な植民地科学者や、アフリカにおける農業開発の中核として設立された東アフリカ農業・林業研究機関の分析を通して、開発におけるエコロジカルなファクターの重視という特徴を明らかにし、従来のステレオタイプ化された開発概念を問い直す。さらに、植民地科学者の開発に対するパースペクティブやアプローチが時として植民地省や植民地政府の方針と乖離していた点を指摘し、開発をめぐるイギリス帝国の重層性を示す。

〈現代史部会２〉

第五共和政憲法制定過程にみるフランスの植民地政策
―「共同体」成立の経緯を通して―

岩場由利子

1958 年 10 月の第五共和政始動と共に、フランスはサハラ以南アフリカとの間に「共同体 Communauté」を発足させた。この「共同体」は当該地域がフランスから一斉独立した 1960 年までの約２年間に機能した共通機構であり、第五共和政憲法第 12 章にも明記された。そこでは共通の国籍・大統領・評議院および加盟国間の首脳会議が規定され、「共同体」は「連邦 fédération」的性質と「連合 confédération」的性質を併せ持つものとなっている。その成立に際してフランスは、共通機構の発足とアフリカの意見に配慮した議事進行を重視した。こうした点から「共同体」は当時のフランスが企図した植民地政策および対アフリカ政策を反映する存在と考えることが出来る。本報告では、「共同体」の成立期である第五共和政憲法制定時（1958 年 6 月-8 月）におけるフランス政府とアフリカ代表の議論を概観することで、フランス植民地政策の一つの終局としての「共同体」体制を再考したい。

〈現代史部会３〉

ナチスによる「安楽死」をめぐる「過去の克服」
―「ナチの被迫害者」認定問題を中心として―

紀　愛子

ナチスによる「安楽死」の犠牲者と遺族は、連邦補償法の対象である「ナチの被迫害者」の定義に含まれない、所謂「忘れられた犠牲者」である。1987 年にようやく代表団体を持った彼らは、以降「人種的に迫害された者」としての認定および他の犠牲者集団との同権化を求め、陳情書の提出など、連邦政府への働きかけを続けてきた。一方の政府は、終結法であることを理由に彼らの要求を退け続けた。現在もなお遺族が訴えを続けるなど、この問題は決着を見ていない。本報告では、この問題をめぐる遺族と政府間の議論を、史料を用いて検討する。遺族がその訴えで強調する、補償法制定時の問題点や、政府が認定を拒む際に用いる論理を分析することで、この認定問題の根底に、「安楽死」の犠牲者と遺族の社会的立場の弱さや、戦後ドイツ医学界の不十分な「非ナチ化」といった要素があることを明らかにする。それによって、遅れているとされる「安楽死」をめぐる「過去の克服」の実相と、その遅れの背景とに光を当てる。

カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策
―1950 年代におけるキリスト教民主同盟（CDU）の住宅政策から―

芦部　彰

1950 年代の西ドイツにおいて、住宅不足の解決は第二次世界大戦後の復興を進めるうえで重要な課題であった。さらに、住宅政策には、冷戦の東西対立という同時代の文脈のなかで、西ドイツが理想とする人間像や社会像を体現する住宅を提示し、東側との違いと東側に対する優越性を示すことも求められた。

こうしたなかで、キリスト教民主同盟（CDU）は、1950 年の第一次住宅建設法によって開始された社会的住宅建設における、戸建て持ち家住宅建設の優先を主張し、1956 年の第二次住宅建設法でその主張を貫徹した。CDU はカトリック、プロテスタントの両宗派を包摂しようとする超宗派政党であるが、この政策の立案を主導したのは、カトリックの政治家、知識人、実践家であった。そこで本報告では、彼らが提示した住宅はどのような理念に立脚していたのか、カトリック社会教義の原則的な理念に即して考察し、戦後西ドイツにおける社会政策とカトリシズムとの関係の一端を明らかにしたい。

〈現代史部会３〉

西ドイツの歴史政策(1969-1974)
―グスタフ・W・ハイネマンと民主主義の伝統―

大下　理世

1969 年、政権交代によって社会民主党・自由民主党連立政権が戦後西ドイツにおいて初めて成立した。この時期は、1960 年代に社会で広く見られた変化－伝統的な価値観の再検討を伴う－の流れを汲み、「もっと民主主義を」をスローガンに諸改革が行われた。その過程でより多くの国民の政治参加が実現した。

このように政治・社会において民主化が求められる一方で、それに対して懐疑的あるいは依然として権威主義的な風潮も存在した。グスタフ・W・ハイネマン大統領(在位 1969-1974 年)は、権威主義を批判し、従来賛美の対象だったビスマルクのドイツ帝国を否定的に捉える見解を示した。そして代わりに、1848 年革命前後の自由を求める運動に現在の民主主義の在り方を考える手がかりを見出した。

本報告では、政治・社会の変化を背景に、従来の伝統的な歴史認識の再検討を促し、新たな伝統の創出を試みたハイネマン大統領の取り組みの意義について考察する。

1980 年代末ユーゴスラヴィアにおける大衆運動の展開と構図
―セルビアとスロヴェニアの事例の比較とナショナリズムの再検討―

鈴木　健太

1980 年代末の社会主義ユーゴスラヴィアでは、経済危機やコソヴォ問題などの様々な課題が累積した。そうした社会主義体制の危機を背景に、その改善や解決を求めて、1988 年頃から国内では集会やデモなどの大衆運動が顕著となった。その中心となったのがセルビアとスロヴェニアである。前者では、コソヴォ問題との関連から、コソヴォの民族的同胞との連帯集会がヴォイヴォディナやセルビア本土の各地で頻発した。後者では、党の青年機関誌の関係者が逮捕された軍事機密漏洩事件をめぐって抗議集会が伸展した。両者の運動が拡大する過程では、民衆の政治参加の拡大、共和国内諸勢力の結集と統一、ナショナリズムとの親和性などといった共通点が観察される。このような観点から、本報告では、ほぼ同時期に進行する上記 2 共和国の運動の諸相を分析・比較しながら、その展開と構図を明らかにし、当時のユーゴスラヴィアにおける民衆参画を伴った政治的変化とナショナリズムの高揚について再検討したい。

小シンポジウム要旨

２０１６年5月２２日（日）１４：００～１７：１５

◆小シンポジウム１（西校舎２階５２６）
「長い「宗教改革」か？ 長い「中世」か？
―ヨーロッパ中近世の教会改革と社会―」

代表：甚野　尚志

◆小シンポジウム２（西校舎２階５２８）
「魔女研究の新潮流
―メディア、領域侵犯、グローバル・ヒストリー―」

代表：楠　義彦

◆小シンポジウム３（西校舎１階５１７）
「グローバリゼーションのなかで歴史を書くこと
―近代歴史学思想へのトランスナショナル・アプローチ―」

代表：小澤　実

◆小シンポジウム４（西校舎１階５１９）
「デジタル資源を活用した資料の共有化とこれからの西洋研究への展望」

代表：小野塚知二

小シンポジウム１

長い「宗教改革」か？ 長い「中世」か？
―ヨーロッパ中近世の教会改革と社会―

趣旨説明　　**甚野　尚志**

中近世ヨーロッパの宗教と政治をめぐる歴史は、一方での中世的なキリスト教世界の統一性・普遍性への志向と、他方でのキリスト教諸宗派の多元性と宗派化への志向のせめぎあいのプロセスともいえる。すなわち中近世ヨーロッパ世界では、一方でキリスト教会の普遍的な秩序の意識が存続しながらも、他方で多元的な宗教世界の構築が進行し、近世における特定の宗派教会と政治権力の一体化へと向かうからである。このような教会の多元性や宗派化を生み出す原動力となったのは、何より教会改革の理念と運動であった。グレゴリウス改革から始まる教会改革が「12世紀の宗教改革」（ジャイルズ・コンスタブル）を生んだという主張もあり、中世から近世を「長い宗教改革」の歴史として捉えることもできよう。また一方で同じ中世から近世の教会史を、宗教の多元性や宗派化を内包しながらもキリスト教中世の理念が存続する「長い中世」（ジャック・ルゴフ）として理解する立場もある。このシンポジウムでは、中近世ヨーロッパでの教会改革を促した理念や運動を比較考察することで、中世から近世の教会改革を貫く思想や行動様式を明らかにし、さらには中近世ヨーロッパ教会史の連続と断絶の様相について見取り図を構築することを目指したい。

報告１：改革修道制におけるカリスマと文書主義
―シトー会と隠修士運動をめぐる一試論―

大貫　俊夫

コンスタブルは『十二世紀宗教改革』で、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけて起こった修道制改革を論じた。そこではクリュニー＝シトー論争が相対化され、新旧修道会の間で方向性の相違はほとんどなかったことが示されている。この時代の「正統」側の宗教運動は、ベネディクトゥスの『戒律』への回帰、無理のない範囲での清貧の追求、教皇権への従属などの点から普遍性・統一性を志向していたと言える。しかし、コンスタブルも認めているように、盛期中世の修道制を特徴づけるのは何といってもその多元性である。『戒律』のみを規範としてきた西欧修道制は、11 世紀の隠修士運動や参事会運動を経て、複数の修道会（ordo）を生み出した。これら並存する修道会には『戒律』を堅持したものもあればそうでないものもあり、各々慣習律などによって修道生活に独自の色を持たせた。それでは、各修道会は修道生活の規範をどのように構築していったのであろうか。本報告では、規範的価値を与えるものとして２つの要素を提示してみたい。１つは、各修道会を代表する修道士のカリスマ性である。ヴェーバーが論じるように、カリスマは個人の「非日常的な」資質であり、超越的な個性がそれを承認する人々に模範を提供した。もう１つは、修道会が作成した基本文書や、毎年条項を追加していく総会決議録などの規範テクストである。この時代に進展した文書主義によって、こうした規範テクストに関する認識と扱い方は随時変化していた。

本報告では、盛期中世の宗教運動のうち、共住修道制を自己改革する中で誕生したシトー会を主に扱い、修道会のみならずローマ・カトリック世界に規範的価値を提供したクレルヴォーのベルナルドゥスの圧倒的なカリスマ性と、修道会が推進した文書主義の相克の様相を考察する。また、参照軸として隠修制から派生したカルトゥジオ会にも言及することで、この時代の宗教運動の多元性を理解するきっかけを提示したい。

報告２：異端審問官＝托鉢修道士による情報伝達
―審問記録の作成・利用・管理をめぐって―

図師　宣忠

12 世紀半ば以来、禁欲的な戒律を守り清貧な生活を実践する「カタリ派」の完徳者は、南フランス各地を巡歴して説教を行っており、「善き人」「善きキリスト教徒」と呼ばれる彼／彼女らの周りには多くの信徒が惹きつけられていた。一方で「キリストの代理者」として首位権の普遍化を推し進めるローマ教皇は、こうした遍歴する異端による「使徒的生活」を前にして司牧の決め手を欠くなか、ついに世俗権力に反異端闘争を呼びかけることになった。こうして発動されたアルビジョワ十字軍（1209-29）はしかし異端根絶には十分な効果を上げず、結果として教皇直属の特設法廷、すなわち異端審問が創設されたのである。異端審問においては、教皇から全権を委任されたドミニコ会やフランチェスコ会の托鉢修道士＝異端審問官による職権的訴追が可能となった。このことは、12 世紀後半の聖書解釈をめぐる論争や説得、13 世紀前半のアルビジョワ十字軍による武力制圧の段階とは異なるフェーズに突入したことを意味する。果たして正統と異端の関係性はこれによっていかなる変化を見せるであろうか。

本報告では、近年のリテラシー研究の動向を踏まえて 13 世紀半ばから 14 世紀初頭の異端審問記録を分析し、審問官が記録をどのように作成、管理、利用していたか、そしてそのことが異端把捉にどれほどの効果があったのかを明らかにする。それにより、この時期に特有の正統と異端の構図を浮かび上がらせ、中世後期への展望を示したい。

報告３：宗教改革・人文主義・中世思想
―ラディカルリフォメーション研究の視点から―

踊　共二

宗教改革者マルティン・ルターは「恩寵のみ・信仰のみ」を強調したが、宗教改革諸派のなかには「自由意思」による「善き行い」と救済を結びつける人たちもいた。いわゆるラディカルリフォメーションを代表する再洗礼派がその典型例である。この報告は、彼らの思想および実践とアウグスティヌス以降の中世神学、ルネサンス思想とりわけ人間論（恩寵論、自由意思論、原罪論などを包摂する）を対比しながら、異同や影響関係を検証する試みである。その目的は、宗教改革を「長い中世」の視点で捉え直すとともに、新しいものの創発の有無を確かめることにある。

具体的に論じるのは、コンラート・グレーベル、バルタザル・フープマイアー、メノー・シモンズといった再洗礼派指導者たち、ルターらの宗教改革者、エラスムスらの人文主義者（16 世紀）、ヤコブス・アルミニウスやルイス・デ・モリナなどの新旧両陣営の神学者たち（17 世紀）の思想である。またこの報告では、宗教改革およびラディカルリフォメーションの担い手たちの教会観・統治権力観についても言及する。それは宗教改革後の宗教と政治の関係が西欧中世とどのような点で連続し、また断絶していたか、見取り図を示すためである。これらの問題に加えて、宗教改革の時代に「清貧」「奇跡」「正統と異端」の概念がどのように変容していたか、あるいは古いものが保たれていたかについても言及したいと思う。

小シンポジウム２

魔女研究の新潮流
―メディア、領域侵犯、グローバル・ヒストリー―

趣旨説明　　**楠　義彦**

魔女研究は、1990 年代以降、日本でも欧米の詳細な地域実証研究の概要が知られるようになった。この時期、人類学の分野でもアフリカを対象にした呪術研究が再活性化した。そこでは呪術は必ずしも前近代的で、後進的な未開の伝統ではなく、グローバルな資本主義の浸透によって顕在化されるものと考えられた。

近年、ベーリンガーは、人類学での呪術研究の動向を受容し、呪術の近代性を評価し、時間的・地域的枠組みを取り払い、16・17 世紀における特殊キリスト教ヨーロッパの事象たる魔女裁判の特権的地位を弱めている。しかし、呪術が時代と地域によって異なる歴史的に構築される概念であるにもかかわらず呪術の定義を行わない点において、そしてまた人類学や宗教学の資料と歴史資料の生産様式の違いを無視して楽観的に総合する点において、歴史学にとって、方法論的に挑戦的である。

本シンポジウムでは、中世から近現代にわたって、ヨーロッパ、南米、東南アジアといったグローバルな視点から、宗教学と人類学を含めて、メディアと表象を基軸として魔女にアプローチする。これらは諸々の政治、社会、宗教、精神を構成する不可欠の要素である。魔女のイメージはメディアによって蓄積・拡散され、実践との影響関係の諸相を創出する。近現代では近代と共存しつつ社会に対する批判を照射する、他方、南米の場合には、カトリックへの強制改宗と伝統信仰との宗教経験の緊張関係を追及する。提示される魔女のイメージは、歴史的かつ社会的な相互作用において形成され、多様でありまた可変的であるが、さまざまな一元化・共有化の動きとの間で常に再構成されていくものと考えることができるだろう。

人類学の分野から川田牧人（成城大学）を、歴史学・法制史の分野から小林繁子（新潟大学）をコメンテーターとして、歴史学として魔女とは何であるか、またグローバルな魔女の問題をいかに歴史学的に捉えるかを考えてみたい。

〈小シンポジウム２要旨〉

報告１：中・近世帝国都市ニュルンベルクにおける魔女・メディア・悪魔学

田島　篤史

我が国の魔女研究は、欧米における活況とは異なり、長期に渡り停滞していた感は否めない。それゆえ日本の歴史学において当該分野が語られる際、いまなお 1990 年代以前の成果が支配的であり、また他分野から乖離したテーマとして閉塞的イメージで捉えられる傾向にある。そこで本報告では、近年にわかに注目を集める研究視点、すなわち魔女問題をメディアとの関連において考察することで、魔女という研究対象に包含される広汎性の提示を試みる。

15 世紀半ばに活版印刷術が発明されたことにより、当時の最新メディアである書籍やビラ、パンフレット等の印刷物が数多く普及した。それに伴い、魔女研究において裁判実践と並び重要な考察対象とされる悪魔学書も多く印刷された。悪魔学とは、中・近世の知識人たちが、魔女迫害を学問的に正当化すべく構築した理論のことであるが、本報告で取り上げるのは、そうした悪魔学書のうち最重要とされる『魔女への鉄槌』（以下、『鉄槌』）である。著者である異端審問官Ｈ・インスティトーリスは、悪魔学者たちの先駆的存在であり、彼は本書を通じて古来ヨーロッパに存在する種々の魔女イメージを統合・体系化し、裁判における具体的指針を提示した。『鉄槌』は 1486 年の初版以来、ヨーロッパ中で数万部が出版され、教皇や皇帝、大学教授たちや後代の悪魔学者たちからも支持されたことから、『鉄槌』の出版が魔女狩りを激化させた、というのが今日の研究者たちの概ね一致した見解である。

ただしこのような評価は研究者たちの推測に基づくものであり、魔女狩りの激化と『鉄槌』の普及との相関関係を実証的に論じた研究は、管見の限りでは存在しない。そこで本報告においては、『鉄槌』の印刷メディアとしての側面に着目しつつ、各所蔵館での調査に基づき提示される本書の製作状況、および一次史料から再構成される魔女裁判の経過をもとに、魔女狩り（＝実践）と悪魔学（＝理論）との相互的影響関係を具体相において考察することを、もうひとつの試みとする。

報告２：表象としての魔女

黒川　正剛

西ヨーロッパ各地で魔女狩りが行われた中世末から近世の時代、魔女を描いたイメージが数多く生み出された。それらの魔女のイメージに着目して魔女狩りの歴史を考えるとき、想像上の存在であるはずの魔女が、版画・絵画・書籍の挿画等に描かれることによって現実の存在として人々に認識されるようになり、魔女の処刑という「リアル」な出来事を生み出したという視点を取ることもできるであろう。

口頭によるコミュニケーションの方法が支配的であった前近代の社会において、視覚イメージは重大な社会的・文化的な力を発揮した。視覚イメージは魔女を具象的に表現するのに役立ち、それによって魔女は当時の人々にとって認識できるもの、信じられるものになったと言える。また、視覚イメージは魔女のイメージのステレオタイプ化をもたらすことにもなった。

本報告では、魔女のイメージを表象という視点から捉えることによって、魔女とは何であったのかという魔女裁判研究の根本問題にアプローチする。19 世紀以降、膨大に蓄積されてきた魔女裁判研究のなかで、魔女を描いた図像に焦点を合わせた研究は最近の新しい動向の一つであり、本報告もその流れに掉さすものである。また、「表象」という言葉については、Ｅ・サイードの表象概念、またＰ・バークが「集合的想像力」「社会的想像力」「複数の『集合的想像力群』」と言い換えている表象概念をふまえている。

本報告では、15 世紀から 17 世紀にかけて制作された魔女を描いた図像を史料として取り上げて、上記の問題を考えていきたい。当時の様々な図像から解読できるのは、異端、女性、インディオ、民衆文化等、当時の西ヨーロッパ社会において問題となっていた多様な事象と魔女の関係である。まさに魔女はこれらの諸事象の表象／代替であったと言えるのである。この視点は必然的に、当時の西ヨーロッパ社会における「他者」の問題と関連してくることになる。

報告３：表象と媒介者―アンデスの悪魔・魔術師・魔女―

谷口　智子

アメリカ大陸を最初に植民地化したスペイン人征服者・教会人達が出会ったネガティブな他者表象の一つが、「悪魔」「魔女（魔術師）」である。彼らにとって、インカやアステカの先住民宗教は、「偶像崇拝」「悪魔崇拝」であり、それに従事する先住民の宗教的職能者達（国家宗教/民間信仰問わず、神官、託宣者、シャーマン、薬草治療者などヒーラー、占い師など）は、必然的に「魔女（魔術師）」という「悪魔」への「媒介者」とみなされた。今回、発表者は「悪魔」という表象と「媒介者」である「魔女（魔術師）」に関わるアンデスの事例を三つ紹介する。まず、植民地期ペルーにおける偶像崇拝・魔術巡察の歴史の中で、チャンカイ地方に関する巡察史料の中で、有名な例を二例紹介し、現代アンデスの山間部で信じられている悪魔的表象である「カリシリ」と、「カリシリ」とみなされ村人に村八分にされた先住民の男、そしてその男に助けを求められた外国人研究者の例を紹介する。「カリシリ」は、アンデス先住民がスペイン人による植民地支配に自己防衛する際に現れた抵抗の表現形態で、逆に外部の敵を「悪魔」的なものとみなし、名づけ返したものである。それは、外部から来た異邦人だけでなく、外部世界の悪魔性と繋がっている内部の媒介者にもその疑いの目が向けられ、現代でも先住民共同体内部でリンチ事件が起こっている。

三例の共通点は、①「悪魔」的表象は外なる他者（もしくは内在する他者）へのレッテルとして貼られる。②「魔女」はキリスト教側から押し付けた異教徒先住民に対する表象の一つであり、「カリシリ」は先住民側から植民者、教会人、外部の敵（あるいは外部と通じる内在する敵）に名づけ返された表象という違いはあるが、これらを生み出す想像力の要素として、「裕福な者への妬み、富への渇望」があることは否定できない。

報告４：近現代の魔女言説とフェミニズム

牟田　和男

異教の伝統を受け継ぎ、薬草の知識に長けて人々を癒す森の賢女という魔女のイメージはどこから来ているのであろうか。この魔女像はフェミニストの間で好評を博していた時期があった。今日ではかつてほどではないが、拡散・断片化しつつ人々の意識の中に深く浸透しているのかもしれない。本報告ではＦ・ヴィーデマンの所論を手掛かりにして、主にドイツ語圏の大衆的魔女論とフェミニズムの関わりを俯瞰した上で、それが歴史学に投げかける問題を考えてみる。

このロマン主義的魔女像の原型は実はフェミニストが批判する家父長的市民社会の文脈から生まれている。19 世紀に成立したそれは世紀末のオカルト秘教学の流行を背景に多くの魔女論の中に受け入れられていった。

女性嫌悪だと思われているフェルキッシュ運動の中にもフェミニズムの論者がおり、その際ゲルマン異教の女性祭司や父権的ユダヤ=キリスト教による魔女狩りという図式は彼女らの立場の集約的な表現にもなった。戦後も多少の修正を加えながらフェルキッシュ思想は生き残り、その魔女像も現代の極右フェミニズムにまで続いている。

しかしより大きな流れは 1960 年代以降の平和運動、環境保護運動と新しいフェミニズムであった。まずはその社会的要求において魔女は父権制社会の被害者にして、これに抗う女性の象徴でもあり、フェミニストの自己同一化像の歴史的手がかりを与えてくれるように思われた。

差異派フェミニズム、さらには霊的フェミニズムの登場によって魔女は自己の内面探求の導き手となるに至る。ユング派心理学の影響の下、個人化された宗教体験において自分の中の女神に出会うことが、癒しの機能を果たすようになった。しかし歴史を離れた神話的魔女はそれでもどこかで歴史的実在性の性格を残している。

こうした魔女像は今日の魔女迫害研究では実証的に支持されておらず、またその方法論的な問題も指摘されている。しかし底流に反アカデミズムをも含む大衆的魔女論は、実証史学と現在の生を生きる人間との関わりを考えさせる。

小シンポジウム３

グローバリゼーションのなかで歴史を書くこと
―近代歴史学思想へのトランスナショナル・アプローチ―

趣旨説明　　**小澤　実**

19 世紀半ば以降に成立した近代歴史学が何を対象として叙述してきたかという問いが、近年世界の歴史学界で再燃している。なかでも、歴史叙述が内包するナショナルな性格を問い直した「過去の表象：ヨーロッパでナショナルな歴史を書くこと」(2003-2008) という国際共同プロジェクトとその成果「ネイションを書くこと」（Writing the Nation series）は注目に値する。他方でナショナルな枠組みを超えるヒト・モノ・カネ・知識などの移動に着目しグローバルヒストリー、ワールドヒストリー、トランスナショナルヒストリーなどと呼ばれる越境的研究も盛りにある。両者の動向を合わせ読むに、ナショナルな性格で捉えられがちな近代歴史学という学知もまた、グローバリゼーションの中で移動し受容されるものとして、こうした越境的研究の対象となりうるのではないか。

本シンポジウムでは、とりわけ知の情報伝達の速度が極端に高まることになった 19 世紀後末から 20 世紀半ばにかけて歴史を叙述した三人の人物とその歴史叙述を検討事例とし、トランスナショナルな観点から歴史叙述を検討したい。第１報告者の藤波はオスマン帝国の法制官僚イブラヒム・ハック（1863-1918）を、第２報告者の小澤は「皇国史観」の唱導者として知られる平泉澄（1895-1984）を、第３報告者の工藤は地中海史を構想したフェルナン・ブローデル（1902-1985）をとりあげる。その後、イギリス近代史を専門とする金澤とアルザス・ロレーヌ地域を専攻する西山がコメントを付す。しかるのち、フロアを交え討論を行いたい。

報告１：法の歴史、イスラームの歴史
―イブラヒム・ハックにみる近代オスマンの歴史叙述―

藤波　伸嘉

本報告では、近代オスマンの法制官僚政治家、イブラヒム・ハックが著した法学校の教科書、『国際法史』（1886 年）を取り上げて、彼の史観を考察する。本書は、ホイートン『欧米の国際法発展史』を下敷きとし、ウェストファリア条約とグロティウスとを画期とする国際法史の語りを受け入れつつも、単にイスラームやオスマンに関わる事項を増補するのみならず、国際法のキリスト教中心性を指摘することで、オスマンの視座からの国際法史の再解釈を試みる独自の著作であった。他方で本書は、古代中世近代の「ヨーロッパ史」の三区分に基づき主権国家体系に収斂する史観の下、民族や宗教ならぬ「国家」を基準とした「法」の定義を前提とする。そのことは、あるべき「法」への適合度如何、「主権」擁護への貢献度如何によって過去のオスマン君主の事績が評価されることももたらした。これに対し、『イスラーム略史』『オスマン略史』『オスマン小史』などの彼の一連の初等教育用の歴史教科書では、ムスリムとしての紐帯や君主への忠誠が強調されるなど、忠良な臣民育成のための語り口が自覚的に採用されているが、その背後には、『国際法史』に見られる時代区分論や「法」の理解が一貫している。教育や外交の実践に際して前景化する表面的な「イスラーム性」にも拘らず、「国家」を基準とした新たな「法」理解に基づく史観は、「主権」の擁護を任とするオスマン法制官僚に内面化されていく。『万国公法』の例を挙げるまでもなく、国際法学は 19 世紀の非西欧各地で史観の変容をもたらしたが、国際法学における文明国基準の中でしばしば「野蛮」の表象とされたオスマンにとっては、自らを「文明」の側に置くべき国際法史の再解釈は、極めて切実かつ実践的な課題だった。その意味で、法制官僚イブラヒム・ハックの法学書は、この過程で如何なる史観が生み出され定着したかを考える上で、重要な素材を提供しているように思われる。

報告２：平泉澄と西洋学知―「皇国史観」以前の平泉中世論再考―

小澤　実

歴史学に携わる者で平泉澄（1895-1984）の名を知らぬ者はおそらくいない。1923年に東京帝国大学講師となった平泉は、26年に『中世に於ける社寺と社會との関係』、『中世に於ける精神生活』、『わが歴史観』という三冊の著作を刊行した後、30年から31年にかけてヨーロッパとアメリカに留学した。そして戦時下帝国日本の国家運営を下支えする歴史思想としての、いわゆる「皇国史観」を唱導する立場となる。戦後大学教授職を辞し歴史学の表舞台を去った平泉の名前は、史学史上、その「皇国史観」とともに記憶されている。

平泉に対する従来の研究の多くも、「皇国史観」との関わりに集中してきた。しかしながらその平泉という歴史家を価値づけるためには、いったん「皇国史観」の唱導者というレッテルを外し、戦前の歴史家集団のひとりとして同時代のコンテクストに置き直す必要があるように思われる。戦前の歴史家集団の特徴の一つに、彼らがインテンシブな外国語教育を受け、情報の源泉として外国語文献を利用し、しばしば国費留学を経験することがある。そのような経験を経た歴史家は、日本史にかかわるドメスティックな問題を扱うにもかかわらず、概念借用や比較事例の引用において、西洋学知に訴える傾向があった。いずれも中世研究に重要な足跡を残した原勝郎（1871-1924）、黒板勝美（1874-1946）、中田薫（1877-1967）などはその代表的な事例である。そういった意味では、平泉もまた、日本国内にとどまることなく、越境的文脈の中で理解しうる人物である。

本報告では、中世概念やアジール論などに注目しながら平泉の著作や留学経験の検討を通じて西洋学知と平泉の関係を問い直し、西洋史家による日本研究へのアプローチの一例を示す。

報告３：地中海史という構想―ブローデルとその後―

工藤　晶人

西欧の国家建設をものさしとする近代の歴史学に対して、現代の歴史学にはナショナルな枠組みを越えていこうとする志向がある。仮にこうした補助線をひいたときに、フェルナン・ブローデル（1902-1985）の歴史学はどこに位置づけられるのか。本報告の前半では、学位論文『フェリペ２世時代の地中海と地中海世界』執筆以前のブローデルをとりあげ、地中海史という構想の背景を考察する。ブローデルは 20 代から 30 代にかけてのおよそ 10 年間をアルジェリアですごした。そこは当時、植民地の学知を支えた「アルジェ学派」の学者たちが集う場となっており、学位論文準備中のブローデルはそこからさまざまな影響を受けた。なかでも重要であったのが、地理学者Ｅ・Ｆ・ゴーティエとのかかわりである。本報告ではゴーティエの文献を手がかりとして、ブローデルと植民地の地理学とのむすびつきを検討し、その延長上に地中海史の分野で近年活発な議論、とくに環境史からの批判を位置づける。そのうえで、今あらためてブローデルを読むことの意味、地中海史の近代をどうとらえるのかという課題、歴史記述と地理的な枠組みの関係について、それぞれ見通しを示したい。

小シンポジウム４

デジタル資源を活用した資料の共有化とこれからの西洋研究への展望

趣旨説明

小野塚知二

この小シンポジウムでは、デジタル・ヒューマニティーズ(以下、DH と略記)の技法・手法、それに関わる研究組織や研究環境によって、西洋史学(広く歴史研究のさまざまな分野)にどのような新しい研究の可能性が開かれうるのかを概観したうえで、それらの可能性を現実のものとするために、どのような困難や壁が存在するのかを示し、それらを乗り越えて、いかなる研究組織や研究環境を構築しなければならないのかについて展望を示す。

これまでに日本に輸入された膨大な量の洋書には、欧米の著名な研究者や蔵書家のものも含まれており、蔵書票や書き入れなどからは、旧蔵者の思想的背景のほか、当時の社会状況が読み取れることもある。一方、これらを史料として研究者の共有財産にするには、少なくとも三つの課題がある。第１は書誌情報･所蔵情報の公開の問題、第２は書誌情報における歴史的情報の記述方法の問題、第３は歴史資料としての公開方法の問題である。

このうち、第２の課題は、史料の内容読解を重視する歴史研究者の立場から、史料管理に重きを置く図書館や図書館情報学の研究者に対して、何らかの問題提起が可能と考えられる。また第３の課題は、洋書のデジタル･アーカイブの必要性、さらには歴史学研究のインフラとしてのデジタル･アーカイブのあり方について、歴史学の側から何らかの行動を起こすべき時期が迫っていることを示している。

この小シンポジムの企画責任者である小野塚知二を中心とした研究チームは、ここ数年、東京大学･経済学研究科所蔵のアダム･スミス文庫を素材として、DH の視点を加味して研究を進めてきた。この小シンポジムでは、これまでの研究の中間報告を行い、前述した２つの課題を解決するための一試論として、デジタル資源を活用した資料の共有化の意味と、これらを活用した西洋史研究への展望について討論してみたい。このシンポジウムは、深貝保則（横浜国立大学）と松尾弘（慶應義塾大学）の両氏を主討論者とし、大澤耕史（東京大学）の司会のもとに行われる。

報告１：日本におけるデジタル･アーカイブの動向と課題

小島　浩之

本報告では、日本のデジタル･アーカイブのこれまでの動向をまとめ、今後の日本における西洋関係史料のデジタル･アーカイブの課題について述べる。

日本のデジタル･アーカイブの特徴は、テキストデータではなく画像データが中心であり、作成・公開の主体が大学や図書館などの組織が中心であると指摘されている。前者については、文字コードの問題が深く関わっている。また後者については、日本において、デジタル･アーカイブの作成・公開が研究者の仕事として評価されにくいという現状が、理由の一つとして指摘できるだろう。

デジタル･アーカイブが組織的業務により作成される場合、対象とされやすいのは、希少性・貴重性が高く、著作権保護期間が消滅しているものである。ただし、こういった史料が学術研究にとって汎用的とは限らず、デジタル･アーカイブが増加しても、研究者からの評価は芳しく無いという悪循環が長らく続いていた。

ところが、Google や電子ジャーナルの高騰などの外圧が強まったこともあり、ここ数年で、国立国会図書館のデジタル･アーカイブは大幅に増加し、機関リポジトリの拡大によって学術論文のデジタル･アーカイブ化が進展した。ただし、この背景には、目録システムの電子化が果たした役割が非常に大きい。目録システムの電子化により、デジタル･アーカイブの公開に際して必要不可欠なメタデータが既に整えられていたのである。ただし洋書については、多くの図書館で目録の電子化すら遅れている。

日本の近代の学術は、西洋の学術研究を文献として移入することから始まった。このため特に大学図書館には多くの洋書の古典籍が所蔵されており、これらのメタデータとデジタル画像を整備し、必要に応じてテキストデータを付加することが課題となっている。ただし、これらはデジタル･アーカイブに特有のことではなく、文献整理や校訂といった歴史学研究の基礎的作業と本質的には同じなのである。

報告２：デジタル・ヒューマニティーズの動向と課題

永崎　研宣

DH とは、紙媒体の特性に依拠した方法論を発達させてきた人文学が、普及しつつあるデジタル媒体を基軸としてその方法論を再構築しようとする研究動向を指している。したがって、実践としては、デジタル化から統計処理まで様々な活動が行われているが、それらは「方法論の共有地」という理念の下で人文学全般にわたる協働の場を形成することを目指し、Alliance of Digital Humanities Organizations（ADHO, http://www.adho.org/）という国際的なゆるやかな連携の場を中心として一つの研究領域を成している。ADHO は欧州と米国の DH 学会が中心となって設立され、日本からも、日本 DH 学会が構成組織となって日本の関連動向との連携を図っている。主な活動としては、オックスフォード大学出版局から論文誌を刊行するとともに毎年 1 回国際学術大会を開催し、この数年は 500～700 人規模の参加者を集めている。本年は 7/12–16、ポーランドのクラクフにて開催予定である。発表申し込みは前年 10 月末に締め切られたが、参加者募集はこれからである。ADHO としては、これ以外にも、世界各地の DH 関連活動を積極的に支援している。

DH では、上記のような理念のもと、デジタルデータを如何にして作成していくか、そのための技術上・運用上の仕組みをどうするか、どのようにして信頼性を担保するか、どのようにして必要な情報を探せるようにするか、そういった取組みをどのようにして研究として評価するか、といった様々なテーマが含まれており、ここにはデジタル･アーカイブも重要な位置を占めている。歴史学においては 2015 年 6 月、アメリカ歴史協会により「歴史学におけるデジタル研究を評価するためのガイドライン」（和訳 https://www.jadh.org/guidelines-for-the-evaluation-of-digital-scholarship-in-history / DOI http://hdl.handle.net/2261/59142）を公開したところであり、人文系研究者がこの種の事柄に本格的に取り組んでいくための基礎がいよいよ整備されつつある。本報告では、主に近年の欧米における DH の状況について紹介したい。

報告３：デジタル・ヒューマニティーズを活用したアダム･スミス文庫研究

森脇　優紀

アダム･スミス文庫とは、1920 年に、新渡戸稲造から東京帝国大学経済学部に寄贈されたスミスの旧蔵書を基にした 314 冊の資料群のことである。このうち、234 冊は「西洋古典籍デジタルアーカイブ」としてインターネットを通じて公開されている。

これらの旧蔵書とその目録は、自身の草稿や原稿を後世に全く残さなかったスミスの思想・理論形成を検討するために不可欠な資料となる。スミス自身の「1781 年目録」のほか、これまでにボナー、矢内原、ズラッファなどによって目録が編まれ、2000 年には、水田洋氏による決定版目録が出版された。しかし、この水田目録では、各書籍に残されている、書物の来歴や所有者（読者）の思想形成過程などの手がかりとなる書き入れに関する記述はなく、またスミスの著作への蔵書の引用や活用に関しても網羅的ではない。

上記の問題を受け、報告者らは既存のデジタルデータを活用しつつ、画像に対応する詳細な原本の書誌を作成し、画像内にも書入のテキスト化と分析、他書への引用参照リンクなど、スミスの思想に関わる情報を構造化して埋め込むなどして、研究者の誰もが自由に効率的に各書籍にアクセスし、各自の研究に利活用しやすい「スミス新カタログ」の生成に取り組んでいる。

報告者は、特に書入の調査に携わってきたが、その中には、判読が困難なものや、筆跡の特定を必要とするものも散見された。こうした書入について、画像とテキストの両方でデジタル公開することは、世界中の研究者の意見や様々な用例を集約でき、デジタル情報化時代に適ったテキスト校訂の一つのあり方となろう。併せて、こういった環境の整備は、難解な西洋手稿史料の判読に取り組む研究者・学生にとっても有益となり、特にテキスト研究の点で、日本における西洋史研究の発展につながると期待できる。

報告４：1781 年アダム･スミス蔵書目録公開への課題と展望
―ラテン語蔵書を中心に―

高橋　裕史

アダム･スミスが自ら作成したといわれる「1781 年目録」（以下、本目録）には、1120 冊ものスミス蔵書が記載され、その学的領域は広範に及んでいる。本目録を分析･研究することにより、それら蔵書がスミスの思想形成にいかなる役割を果たしたか解明できると期待される。DH の手法を用いた本目録の研究と公開が、そこにどのような可能性をもたらすことになるか考えてみよう。

第一に、デジタル化の技術によって紙質の劣化を被らずに広く一般の利用に供されること、第二に、十分に頁を開けないスミス蔵書であっても文字の解読が可能と閲覧が可能となること、第三に、本目録の公開によって、スミスを介して 18 世紀ヨーロッパの「知の枠組み」の一端を、西洋史はもとより経済学、西洋書誌学、言語学その他、学際的な側面からの研究が可能となることである。

しかし、上記の諸点を実現するには乗り越えるべき課題も多い。ラテン語著書の場合、省略されている praenom の扱い、長母音符号の記載の有無の扱い等に加えて、堅固なラテン語力が何よりも求められることが指摘できる。フランス語著書では、アクサン記号の無いものにそれを付すべきか否か、現代フランス語とは異なる綴りをそのままにすべきか否か、などの問題がある。さらに、本目録所収蔵書がスミスの思想や著作に与えた影響を論じるには、哲学、文学、経済学、歴史学、西洋古典語学、自然科学など広範な分野の専門家の共同が求められる。

このような課題を克服するには、スミスの経済思想という一個人、一分野の枠を超えて、むしろ当のスミスを介した学際的な研究共同体による、地道で根気ある研究活動の構築と継続が不可欠となろう。

第66回『日本西洋史学会大会報告集』

2016年5月21日発行

編集・発行

第66回日本西洋史学会大会準備委員会

〒108-8345

東京都港区三田２-１５-４５

慶應義塾大学文学部人文社会学科西洋史学専攻内

E-MAIL: nihon.seiyoushigakkai@gmail.com

印刷

梅沢印刷

〒108-8345

東京都港区三田２－１５－４５

℡ 03-3453-5976

オックスフォード ブリテン諸島の歴史

全11巻

全巻完結！

イングランド一国史観をのりこえて、イングランド・ウェールズ・スコットランド、アイルランドの諸地域の総合的関係を視野に収めたはじめての通史。政治史のみを追うのではなく、文化・経済・社会・宗教など様々な視点からそれぞれの分野の研究者が専門的知識を展開。

第1巻 ローマ帝国時代のブリテン島 ◎4800円
第2巻 ポスト・ローマ ◎4840円
第3巻 ヴァイキングからノルマン人へ ◎7400円
第4巻 12・13世紀 1066年～1280年頃 ◎5800円
第5巻 14・15世紀 ◎4800円
第6巻 16世紀 1485年～1603年 ◎4800円
第7巻 17世紀 1603年～1688年 ◎6800円
第8巻 18世紀 1688年～1815年 ◎5800円
第9巻 19世紀 1815年～1901年 ◎4800円
第10巻 20世紀 1901年～1951年 ◎5800円
第11巻 20世紀 1945年以降 ◎6400円

国連と帝国 ——世界秩序をめぐる攻防の20世紀

マーク・マゾワー著／池田年穂訳　覇権を争う帝国の為政者たちは、国連に何を託したのか。二〇世紀ヨーロッパ史の大家マゾワーが描く、「「逆説」の理想的国際平和機構論」。◎2800円

破断の時代 ——20世紀の文化と社会

エリック・ホブズボーム著／木畑洋一・後藤春美・菅靖子・原田真見訳　二〇世紀を代表する偉大な歴史家ホブズボームの一九六四年～二〇一二年の講演をもとに、加筆・修正した遺作。マルクス主義史観のもと、主に文化という側面から二〇世紀の歴史・文化・人間について語られる。◎4500円

カール・クラウスと危機のオーストリア ——世紀末・世界大戦・ファシズム

高橋義彦著　孤高の言論人、カール・クラウスの行動と思想を読み解くとともに、「世紀末」「第一次世界大戦」「ファシズム」という三つの時代における、オーストリア／ウィーンの政治思想・文化的状況を浮き彫りにする。◎3600円

慶應義塾大学出版会

〒108-8346　東京都港区三田2-19-30［図書目録送呈・価格税抜］
http://www.keio-up.co.jp/　☎03-3451-3584　Fax 03-3451-3122

グローバルヒストリーと戦争

秋田 茂　桃木 至朗　編著

西洋中心史観とは全く異なる、アジア・日本を重視した新たなグローバルヒストリー、戦争論！

①戦争と秩序形成、②戦争と歴史認識・アイデンティティの形成、③武器・軍事技術の移転と秩序形成、の三点を重視し、古代から現代までの、東アジア、東南アジア、イスラーム世界、西欧諸国、米国などのグローバルにまたがる歴史を、戦争という切り口から叙述する。　四六判・並製・350頁　定価（本体2,000円＋税）ISBN978-4-87259-437-9

テマ反乱とビザンツ帝国

コンスタンティノープル政府と地方軍団

中谷功治 著

中期ビザンツ国家の最重要制度であるテマ制について本邦初の本格的研究書。国内外の中期ビザンツ史研究に新たな視点を投じる。

A5判・上製・430頁　定価（本体6900円＋税）

市民のための世界史

大阪大学歴史教育研究会 編

A5判・並製・312頁　定価（本体1900円＋税）

グローバルヒストリーと帝国

秋田 茂　桃木至朗 編

四六判・304頁　定価（本体2000円＋税）

わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史

歴史学と歴史教育の再生をめざして

桃木至朗 著

四六判・272頁　定価（本体2000円＋税）

多言語社会ルクセンブルクの国民意識と言語

第二次世界大戦後から1984年の言語法、そして現代

小川 敦著／262頁　定価（本体4900円＋税）

リスク社会を生きる若者たち

―高校生の意識調査から―

友枝敏雄 編／250頁　定価（本体2300円＋税）

大阪大学出版会

〒565-0871　大阪府吹田市山田丘2-7　大阪大学ウエストフロント
Tel：06-6877-1614　info@osaka-up.or.jp　※価格税込

写真とプロパガンダ 1945–1958

ミランカ・トーディチ著　荒島浩雅訳

第二次大戦後のユーゴスラヴィア、チトー政権下、ユートピア性を帯びた社会主義思想をプロパガンダするために生み出された大量の写真から、そのレトリックを抽出する。◉3000円＋税

女教皇ヨハンナ

伝説の伝記〈バイオグラフィー〉

マックス・ケルナー＋クラウス・ヘルバース編

藤崎衛＋エリック・シッケタンツ訳

現代まで語り継がれる伝説の女教皇の鮮烈な生涯。現代歴史学の手法を用いて「女教皇伝説」をひもとく。　◉3000円＋税

ビフォー　ザ　バウハウス

帝政期ドイツにおける建築と政治　1890–1920

ジョン・V・マシュイカ著　田所辰之助＋池田祐子訳

バウハウスの栄光の影に隠されたドイツ建築・デザイン史。建築とデザインの「定型（規格）化」か、芸術の「独自性」か、をめぐる論争の今日的意味を問う。　◉7400円＋税

ヴィリー・ブラントの生涯

グレゴーア・ショレゲン著　岡田浩平訳

戦後処理に真摯な態度で臨み、東西対立のなか相互和解に奮闘したこの世界一級クラスの政治家を抜きにして、ドイツの戦後は語れない。ブラント伝のベストセラー！　◉4000円＋税

文化遺産としての中世

近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存

泉美知子著

国家として、国民として、どのような遺産を継承するのか。大革命後の破壊を契機にその問いに直面したフランスにおける「文化遺産」という思想生成の道程を検証する。◉5000円＋税

中世後期のドイツ民間信仰

伝説〔ザーゲ〕の歴史民俗学

ヴィル－エーリヒ・ポイカート著　中山けい子訳

動物のデーモン、巨人、森に棲む怪人、元素の精……、伝説を史料として民衆の俗信の変化、表象の変容を、歴史民俗学、精神史や民衆史の観点から描き出した画期的試み。◉2800円＋税

【定期刊行】**西洋美術研究**　No.18 特集「スペクタクル」　No.17 特集「記憶と忘却」（各◉2900円＋税／既刊好評発売中／定期購読承ります）

三元社　〒113-0033 東京都文京区本郷 1-28-36 鳳明ビル　電話 03-5803-4155　ファックス 03-5803-4156　http://www.sangensha.co.jp

古代世界の呪詛版と呪縛呪文

ジョン・G・ゲイジャー 編　志内一興 訳　5400円

西洋古代世界において一二〇〇年間続けられた呪詛の発見事例から厳選した呪詛板の翻訳と解説で、古代人の生の実相を明らかにする。

ガンダーラ彫刻と仏教

内記　理 著　3800円

ガンダーラ彫刻はいつ、何のためにつくられたのか？ 考古学的な情報を最大限に活用して、ガンダーラ彫刻のつくられた時代をみつめ直す。

◉西洋古典叢書

リウィウス

ローマ建国以来の歴史2

――伝承から歴史へ（2）

岩谷　智 訳　予価4000円

本分冊では十二表法制定のための十人委員会の動向、高位公職に関する貴族と平民の抗争、ウェイイ征服とガリア人のローマ占拠などが扱われる。（全14冊）

※2016年度 第2回配本（6月発売）

プルタルコス　**英雄伝 4**　城江良和 訳　4600円

プロコピオス　**秘史**　和田　廣 訳　3400円

世界大学ランキングと知の序列化

――大学評価と国際競争を問う

石川真由美 編　3800円

世界大学ランキングの実態とそのもたらす混乱を冷静に分析し、新しい大学・研究評価のあり方を提案する。大学・メディア関係者必読。

学術書を書く

鈴木哲也・高瀬桃子 著　1700円

各学界でも絶賛。今の時代に人文学を記述する方法のすべてがここにある。

京都大学学術出版会　606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69 京都大学吉田南構内〈表示価格は税込〉　URL http://www.kyoto-up.or.jp/ TEL 075-761-6182 FAX075-761-6190

CLIO vol. 30

定価　1,000円

講演記録
北原敦ほか　フランス革命からファシズムまで
―― 二宮・柴田・グラムシとの対話

論文
桑子　亮　フランス宗教戦争期における政治と宗教
―ナント王令の成立過程および内容からの検討―

小西　正紘　「ピータールーの虐殺」という表象
―19世紀初頭イングランドの民衆の政治文化におけるジェンダーと愛国心―

特別寄稿
ピエール＝イヴ・ボルペール（田瀬望・見瀬悠訳）社交性の「製作所」

史料解題・翻訳
柏達己・佐藤昇訳　ヒュペレイデース新断片

藤崎衛監修　第一リヨン公会議（1245年）決議文翻訳

留学体験記
八谷　舞　“Welcome to historians’ world”：アイルランド留学体験記

クリオの会
〒113-0033　東京都文京区7-3-1　東京大学大学院　西洋史学研究室内
Tel: (03)5841-3789　Email: clionokai@gmail.com

好評新刊

アイルランド大飢饉
ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル
勝田俊輔・高神信一編／勝田俊輔、武井章弘、古家弘幸、高神信一、金澤周作、脇村孝平、ジェーン・オハロラン、L・M・カレン（執筆順）
19世紀西ヨーロッパ最悪の惨事＝大飢饉を解明した日本初の取組
A5上製　四〇〇頁　¥六、五〇〇

レコンキスタの実像
中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和
黒田祐我著
「境域社会」の実態を究めた画期的研究
A5箱　四五〇頁　¥八、〇〇〇

国制史は躍動する
ヨーロッパとロシアの対話
池田嘉郎・草野佳矢子編
〈執筆者〉池田嘉郎、渋谷聡、根本聡、青島陽子、草野佳矢子、巽由樹子、中堀博司、田中良英、松戸清裕（執筆順）
A5上製　三七〇頁　¥五、〇〇〇

好評発売中

ある反戦ベトナム帰還兵の回想
W・D・エアハート著／白井洋子訳（刀水歴史全書89）
四六上製　四八五頁　¥三、五〇〇

第一次大戦と西アフリカ
フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」
小川　了著
A5上製　四〇〇頁　¥五、〇〇〇

国家の周縁
特権・ネットワーク・共生の比較社会史
田村愛理・川名隆史・内田日出海編
A5上製　三七〇頁　¥四、五〇〇

魔女と魔女狩り（刀水歴史全書87）
W・ベーリンガー著／長谷川直子訳
近年の研究に基づく初めての魔女の世界史
四六上製　四八五頁　¥三、五〇〇

妖獣バニヤップの歴史
オーストラリア先住民と白人侵略者のあいだに
藤川隆男著（刀水歴史全書91）
先住民の伝説から生まれたバニヤップを通して白人の侵略の意味を改めて辿る
「御伽噺」
四六上製　三〇〇頁　予価¥一、三〇〇

これが歴史だ！
21世紀の歴史学宣言
ジョー・グルディ&D・アーミテイジ／平田雅博・細川道久訳（刀水歴史全書93）
歴史の力は…人々を解放する
四六上製　二〇〇頁　¥一、二〇〇

5月刊行予定

【価格は税抜】
〒101-0065
千代田区西神田2-4-1東方学会本館

刀水書房
tel. 03-3261-6190 fax. 03-3261-2234
http://www.tousuishobou.com

イギリス近世・近代史と議会制統治

青木康編著、仲丸英起、松園伸、辻本諭、薩摩真介、一柳峻夫、金澤周作、川分圭子、水井万里子、君塚直隆、ジョナサン・バリー　4000円

15世紀末から19世紀前半の英国議会の動きを専門家が多角的に分析。

ジャン・ジョレス　1859–1914

正義と平和を求めたフランスの社会主義者

V・デュクレール著、大嶋厚訳　3900円

「フランス史の巨人」の生涯と死後の運命を描く決定版。口絵多数掲載！

サッチャーと日産英国工場

誘致交渉の歴史　1973–1986年

鈴木均著　2200円

「強い指導者」サッチャーが、日本に見せた顔は……。読売新聞書評欄で紹介！

ヨーロッパとはどこか

統合思想から読む二〇〇〇年の歴史

中嶋洋平著　2400円

統合思想の観点から壮大に描くヨーロッパ統合の夢と現実。ヨーロッパはどう生まれ、どこへ向かうのか？

国家の歴史社会学〔再訂訳版〕

B・バディ／P・ビルンボーム著、小山勉、中野裕二訳　2700円

「国家」（Etat）とは何か。歴史学と社会学の絶えざる対話の成果。国民国家研究の基本書が訳も新たに再刊。

太陽王時代のメモワール作者たち

政治・文学・歴史記述

嶋中博章著　3700円

ルイ14世時代の政治と文化の交錯を回想録を読み解きながら考察。

フランスの肖像

歴史・政治・思想

M・ヴィノック著、大嶋厚訳　3200円

政治史・思想史学の泰斗がやさしく書き下ろした全30章。

吉田書店　102-0072　東京都千代田区飯田橋2-9-6　東西館ビル本館32　（価格は税別）
TEL:03-6272-9172　FAX:03-6272-9173　http://www.yoshidapublishing.com/

古都トレド

異教徒・異民族共存の街

レコンキスタによる奪回後も異教徒・異民族・異文化が共存し続けた中世盛期のトレドから現代の人種的・宗教的対立緩和への道を探る。

芝　修身 著　本体2700円

レナード・ウルフと国際連盟

理想と現実の間で

国際連盟設立に大きな影響を及ぼした一人の知識人。その卓越した眼力は、二つの大戦の時代になにを見ていたのか。

簸田有紀子 著　本体5000円

アルプス文化史

越境・交流・生成

アルプス――それは古来より峻険な山々を越えて人・モノ・思想が行き交う地。アルプスを軸に交流するヨーロッパとアルプス独自の事象を描き出す。

踊　共二編　本体2700円

海のイギリス史

闘争と共生の世界史

近代イギリスを中心に、海に生きる人間の光と影の歴史を描く。本書を羅針盤に海事史研究という大海原に漕ぎだそう！

金澤周作編　本体2800円

叢書・比較教育社会史（展開篇）全3巻

近代・イスラームの教育社会史

保護と遺棄の子ども史

福祉国家と教育

各本体4200円

ドイツ環境史

エコロジー時代への途上で

F・ユーケッター著　本体2800円

俗都市化

ありふれた景観　グローバルな場所

フランセスク・ムニョス 著
竹中克行・笹野益生 訳　本体4000円

服部伸・藤原辰史・佐藤温子・岡内一樹 訳

グローバル化と文化の境界

多様性をマネジメントするヨーロッパの挑戦

竹中克行編著　本体3300円

イギリス文化史

井野瀬久美恵 編　本体2400円

スペインの歴史

立石博高ほか 編　本体2300円

イタリア都市社会史入門

12世紀から16世紀まで

齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也 編　本体2800円

ハプスブルク史研究入門

大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一 編　本体2800円

ハプスブルク帝国政治文化史

継承される正統性

篠原琢・中澤達哉 編　本体4000円

ビザンツ 交流と共生の千年帝国

井上浩一・根津由喜夫 編　本体4700円

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前　図書出版 昭和堂　郵便振替 01060-5-9347
TEL 075-706-8818　FAX 075-706-8878　http://www.showado-kyoto.jp

■「長い 19 世紀」における学術資料のデジタル・アーカイヴ

GALE CENGAGE Learning

19 世紀コレクションオンライン版
Nineteenth Century Collections Online (NCCO)

Nineteenth Century Collections Online (NCCO)は壮大な学術的デジタル化プロジェクトです。いわゆる「長い 19 世紀」における広範囲な一次史料について収録コンテンツを検索可能にします。これまで入手が困難であった一次史料が、多様かつ特徴的なコレクションとして収録されております。英語を中心に非西洋語をも含めた書籍やモノグラフ、新聞、雑誌はもちろん、日記や手紙、マニュスクリプト、写真、パンフレット、そして地図や統計など、収録内容も多岐に及びます。

Archive 1: 英国の政治と社会事情 British Politics and Society
Archive 2: アジアと西洋：外交と文化交流 Asia and the West: Diplomacy and Cultural Exchange
Archive 3: 英国の演劇・音楽・文学 British Theatre, Music, and Literature: High and Popular Culture
Archive 4: コルヴァイ城所蔵コレクション：ヨーロッパの文学 Corvey Collection of European Literature
Archive 5: ヨーロッパとアフリカ Europe and Africa: Commerce, Christianity, Civilization, and Conquest
Archive 6: レンズを通じて見た 19 世紀世界 Photography: The World through the Lens
Archive 7: 科学・技術・医学の歴史 Science, Technology, and Medicine, 1780–1925
Archive 8: 女性：国境を越えたネットワークの形成 Women: Transnational Networks
Archive 9: 科学・技術・医学の歴史 第2部 Science, Technology, and Medicine, Part 2
Archive 10: 児童文学と幼年期 Children's Literature and Childhood
Archive 11: 世界地図の時代：地図と紀行文学 Mapping the World: Maps and Travel Literature
Archive 12: 宗教・精神世界の改革と社会 Religion, Spirituality, Reform, and Society

日本販売代理店
極東書店

〒101-8672 東京都千代田区三崎町 2-7-10 帝都三崎町ビル TEL03(3265)7531 FAX(3556)3761
http://www.kyokuto-bk.co.jp E-mail: info@kyokuto-bk.co.jp
〒530-0051 大阪市北区太融寺町 1-17 梅田アスカビル TEL06(6362)5515 FAX(6362)8882
〒604-0985 京都市中京区麩屋町通丸太町下る 井口ビル TEL075(231)2093 FAX (231) 3859
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小榎ビル TEL092(751)6956 FAX (741) 0821

イギリス近世の国家と都市
王権・社団・アソシエーション
坂巻 清 著
16・17世紀イギリスの国家秩序の編成において、支配権力が民衆の自発的・自然生的な社会的結合をどのようにして包摂してきたかを、法人団体（コーポレーション）に着目して明らかにする。
A5判 312頁 予価本体5200円

忘れられたマイノリティ
迫害と共生のヨーロッパ史
関 哲行／踊 共二 著
ユダヤ人、ムスリム、キリスト教世界のなかの異端など、宗教的マイノリティの視点から、キリスト教ヨーロッパ社会の深層をさぐるとともに、世界各地へ広がった宗教的マイノリティへの迫害の歴史にも目をむけた書。
四六判 256頁 予価本体2500円

【山川レクチャーズ8】
中世ヨーロッパの都市と国家
ブルゴーニュ公国時代のネーデルラント
マルク・ボーネ 著／河原 温 編
14～16世紀、ネーデルラントにおける君主と都市の競合関係のなかで、都市と市民の多様な世界に「近代市民性」を読み解く。ベルギーの最高学府ヘント大学のボーネ教授による歴史学講義。
A5判 312頁 予価本体1500円

歴史のなかの社会国家
20世紀ドイツの経験
辻 英史／川越 修 編
個人の生活のさまざまな局面や社会全般におよぶ社会国家の諸機能に注目し、社会的安全を国家による政策や制度のみに収斂させるものとは別の角度からドイツ社会国家の歴史的発展の見通しを試みる。
A5判 352頁 本体4000円

フランス革命とパリの民衆
「世論」から「革命政府」を問い直す
松浦義弘 著
手稿史料を丹念に読み解き、食糧騒擾の時代に起こった二つの事件、「ジェルミナルのドラマ」と「テルミドール9日のクーデタ」をとおして、パリの民衆がフランス革命をどう動かしたのかを考える。
A5判 468頁 本体5800円

帝政ロシアの国家構想
1877–78年露土戦争とカフカース統合
高田和夫 著
近代ツァリーズムが保持した国家構想のもと、帝政ロシアはカフカース地方を帝国の一員として取り込んでいった。その過程を最終の露土戦争に着目し、「人の移動」に焦点をあてて明らかにする。
A5判 356頁 本体7000円

山川出版社 〒101–0047 東京都千代田区内神田 1–13–13 ［価格は税別］
電話 03–3293–8131 http://www.yamakawa.co.jp/

◆世界の教科書シリーズ

ドイツ・フランス 共通歴史教科書【近現代史】

ウィーン会議から1945年までのヨーロッパと世界

ペーター・ガイス、ギヨーム・ル・カントレック 監修
福井憲彦、近藤孝弘 監訳　加納教孝、北村春子、木邑洋子、シドラ房子、島村賢一、高橋文子、水野明美 訳　◎本体5400円

独仏共同により編纂された共通歴史教科書の第2巻。ウィーン会議以後、独仏戦争、第一次世界大戦、ナチス台頭、そして第二次世界大戦勃発から終結まで、両国が激しく対立した期間を扱う。ギムナジウム第11ないし12学年（独）、リセ第1学年（仏）対象。

ポルトガルの歴史

小学校歴史教科書

アナ・ロドリゲス・オリヴェイラ、アリンダ・ロドリゲス、フランシスコ・カンタニェデ 著
A・H・デ・オリヴェイラ・マルケス 校閲　東明彦 訳　◎本体5800円

ローマの征服やイスラームの半島支配に対する抵抗にスペインからの「再独立」など国家形成や独立の維持、さらに海外進出の歴史に1974年の「革命」まで、豊富な図版・資料で描き出した通史。

超大国アメリカ100年史

戦乱・危機・協調・混沌の国際関係史

松岡完 著　◎本体2800円

テロの脅威や世界の分極化の前に呻吟する唯一の超大国アメリカ。第一次世界大戦から現代まで、アメリカが形づくり守ってきた国際秩序とそれに対するさまざまな挑戦の歴史を18の章で描写することで、現代国際関係の全体像を俯瞰する。

兵士とセックス

第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか?

メアリー・ルイーズ・ロバーツ 著
佐藤文香 監訳　西川美樹 訳　◎本体3200円

1944年夏、フランス・ノルマンディーにアメリカ軍がさっそうと乗り込んだ。連合国軍の一員としてフランスを解放するために。しかし、彼らが行ったのはそれだけではなかった。売買春、レイプ、人種差別……。いま明かされる驚愕の真実とは!

▶上野千鶴子氏推薦！　▶朝日新聞・毎日新聞ほか書評掲載

欧米社会の集団妄想とカルト症候群

少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人種主義の生成と連鎖

浜本隆志 編著　◎本体3400円
柏木治、高田博行、浜本隆三、細川裕史、溝井裕一、森貴史 著

現代の問題とも深く関わる集団妄想やカルトは、過去の欧米諸国において、どのようなものが生まれ、猛威を振るったのか。その生成のメカニズムを、異端狩り、魔女狩り、人種差別ほかの豊富な事例を通史的に展望しながら宗教・社会史的な視点から考察する。

▶朝日新聞書評掲載

現代ヨーロッパと移民問題の原点

1970、80年代、開かれたシティズンシップの生成と試練

宮島喬 著　◎本体3200円

変革期イスラーム社会の宗教と紛争

塩尻和子 編著　◎本体2800円

明石書店
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5
TEL 03-5818-1171　FAX 03-5818-1174
http://www.akashi.co.jp/　振替口座00100-7-24505　＊図書目録送呈　＊消費税別

ヨーロッパ史のなかの思想

▼ドイツを中心としたヨーロッパ近現代史の多様な側面を気鋭の研究者たちが論じる。プロイセンの時代から第二次世界大戦期までのドイツにおける思想、民族性、政治などの変遷を取り上げる。

大内宏一 編　4000円＋税

ナチス・ドイツとフランス右翼

パリの週刊紙『ジュ・スイ・パルトゥ』によるコラボラシオン

▼1930年代、国際情報紙から対独協力主義メディアへ——敗戦と占領という特殊な事情に条件づけられたヴィシー時代に生きた人びとの言動にその本質を見いだし、パリの極右週刊紙の誕生とその展開を探求。

南祐三 著　4000円＋税

スウェーデン・モデル

グローバリゼーション・揺らぎ・挑戦

▼「戦後200年の国―スウェーデン。200年間戦争を起こしていないこの北欧の福祉国家が実行している「スウェーデン・モデル」にこそ、日本が進むべき未来へのヒントがある。

岡澤憲芙、斉藤弥生 編著　2200円＋税

16・17世紀の海商・海賊

アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇

▼同時期に発生した海賊誕生の背景に、近世国家成立という共通項を見いだす試み。

越村勲 編　3200円＋税

スペイン文化入門

佐々木孝 著、碇順治 編　／1800円＋税

▼各紙誌に発表した文章をまとめた、滋味溢れる多面的なスペイン文化論。

本棚に知の彩りを
彩流社
〒102-0071 千代田区富士見 2-2-2
☎03-3234-5931　●新目録送呈
●内容の詳細はウェブにて

悠書館 YU SHO KAN
〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-21-302 TEL03-3812-6504 FAX03-3812-7504
www.yushokan.co.jp/ ＊価格税別・内容見本進呈

戦後70年——

わが国で初めて本格的に紹介される宣伝雑誌《シグナル》の誌面を通して、ナチス・ドイツのプロパガンダの内幕に迫る！

ヒトラーの宣伝兵器

■プロパガンダ誌《シグナル》と第2次世界大戦■

ジェレミー・ハーウッド[著] 源田 孝[監修]
《シグナル》掲載の記事や写真を、現実の戦闘や政治の推移と照らし合わせ、ヒトラーとナチス党がいかに自国民を煽りたて、また敗色が濃厚になるにつれ、いかに国民の眼をそらそうとしたかが明らかに……
A4判 カラー226頁■8000円

最盛期には欧州で20以上の言語版で毎号約250万部を発行した《シグナル》

図説 古代エジプト人物列伝

100人の古代エジプト人の生涯を通していきいきと再現されるファラオのもとでの生活

T・ウィルキンソン[著] 内田杉彦[訳]
著名なファラオや神官だけでなく、無名の職人や芸術家、盗賊など、ナイルのほとりで営まれていた生活の息吹を感得。
A5判 488頁■6000円

図説 大西洋の歴史

〝暗黒の海〟から、世界をつなぐ水路となるまで、数千年間の大航海への誘い——

■世界史を動かした海の物語■

M・サンドラー[著] 日暮雅通[訳]
太古より暗黒の海と恐れられ、長きにわたって人類を分断していた海が、四大陸をつなぎ世界の大動脈となるまでの数千年の歴史を、500点近い図版とともに語った、冒険と発見の書。朝日新聞に書評掲載(水野和夫氏評)。
A5判 556頁■6000円

北海・バルト海の商業世界

産業革命～資本主義興隆の母体となった北方ヨーロッパの商業活動

斯波照雄・玉木俊明[編]
北海・バルト海世界は、広大な後背地を有し、時に地中海世界以上に繁栄を誇った。ハンザ都市を中心に発展した北方ヨーロッパの、中世盛期から近世にいたるまでの推移を、海洋・陸上双方の側面から多角的に論じたわが国初の試み。
四六判 460頁■4500円

古代ユダヤ戦争史

旧約聖書の戦争を地政学的観点から臨場感ゆたかに分析！

ギボン&ヘルツォーグ[著] 池田裕[訳] ■4800円

イスラーム歴史文化地図

世界中で拡大する様を多角的に捉えた、目で見る決定版！

ルースヴェン他[著] A4変判カラー■12000円

西アジア文明学への招待

古代西アジアは、なぜ現代文明の基層となりえたのか？

筑波大学西アジア文明研究センター[編] ■2500円

トウモロコシの世界史

古代中南米において神と崇められた作物の9000年

鵜飼保雄[著] 四六判■4000円

品種改良の世界史・作物編

古代文明の繁栄と近代国家の基盤を支えた改良の歴史

鵜飼保雄&大澤良[編] 四六判■4500円

フランス・モード史への招待

服飾の歴史を通して、時代の精神を読み解く

人間の基本的な営み〈衣〉の形態的変遷をたどるだけでなく、その変遷を促した社会経済的ないし文化的背景をも視野に入れ、それぞれの時代の息づかいを再現しようとした挑戦的な試み

【執筆陣】
徳井淑子：お茶の水女子大学名誉教授
内村理奈：日本女子大学家政学部准教授
角田奈歩：日本学術振興会特別研究員
朝倉三枝：神戸大学大学院国際文化学部准教授
新實五穂：お茶の水女子大学基幹研究院助教
原口碧：お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科研究員

四六判 344ページ 本体3,000円 978-4-86582-010-2

〈創元世界史ライブラリー〉　世界を知る、日本を知る、人間を知る――専門研究の枠組みを越えて、歴史学の最前線と面白さを平易な言葉とビジュアルで伝える新しい世界史叢書。

歴史の見方
――西洋史のリバイバル

玉木俊明著　四六判　256頁　予価（本体2200円＋税）

歴史研究とはどう行われるべきなのか――そのヒントは「名著」にある。本書では、日本の西洋史学に少なからぬ影響を与えてきた綺羅星のごとき名著の数々を再評価、優れた研究の手法や意義、時代の潮流を明らかにする。研究の最前線に立つ著者の考察は力強く、歴史学という知的営為の意味をあらためて考えさせる。著者渾身の一冊。

【好評既刊】

修道院の歴史―― 聖アントニオスからイエズス会まで
杉崎泰一郎著　四六判　288頁　定価（本体2,200円＋税）

鉄道の誕生――イギリスから世界へ
湯沢威著　四六判　304頁　定価（本体2,200円＋税）
第40回交通図書賞［歴史部門］受賞（2015年）

ハンザ「同盟」の歴史――中世ヨーロッパの都市と商業
高橋理著　四六判　304頁　定価（本体2,200円＋税）

近代ヨーロッパの形成――商人と国家の近代世界システム
玉木俊明著　四六判　256頁　定価（本体2,000円＋税）

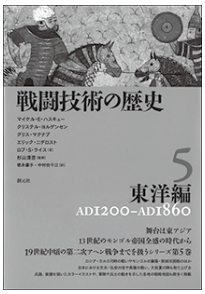
海戦の歴史 大図鑑

R・G・グラント著／
五百旗頭真、等松春夫監修／
山崎正浩訳

307×258mm 上製　360頁
定価（本体15,000円＋税）

ガレー船時代の地中海から大航海時代の太平洋、南北戦争、そして第二次世界大戦と戦後の紛争まで、豊富な図版で海戦の歴史を活写。

戦闘技術の歴史5
東洋編　AD1200-AD1860



M・E・ハスキューほか著／
杉山清彦監修／
徳永優子、中村佐千江訳

A5判上製　376頁
定価（本体4,500円＋税）

舞台は東アジア。モンゴル帝国全盛期から第二次アヘン戦争までの主要な戦闘を扱う大好評シリーズ第5巻。図版、戦略地図満載。

第一次世界大戦の歴史 大図鑑

H・P・ウィルモット著／五百旗頭真、等松春夫監修／山崎正浩訳
307×258㎜　336頁　定価（本体13,000円＋税）

世界の軍装図鑑 18世紀-2010年

C・マクナブ著／石津朋之監訳／餅井雅大訳
257×182㎜　440頁　定価（本体4,500円＋税）

米ソ冷戦秘録 幻の作戦・兵器 1945-91

M・ケリガン著／石津朋之監訳／阿部昌平訳
246×197㎜　192頁　定価（本体2,400円＋税）

第二次世界大戦秘録 幻の作戦・兵器 1939-45

M・ケリガン著／石津朋之監訳／餅井雅大訳
246×197㎜　192頁　定価（本体2,400円＋税）

【好評既刊】　各巻定価（本体 4,500 円＋税）

戦闘技術の歴史1　古代編　3000BC-AD500
S・アングリムほか著／松原俊文監修　A5判　404頁

戦闘技術の歴史2　中世編　AD500-AD1500
M・ベネットほか著／淺野明監修　A5判　368頁

戦闘技術の歴史3　近世編　AD1500-AD1763
C・ヨルゲンセンほか著／淺野明監修　A5判　384頁

戦闘技術の歴史4　ナポレオンの時代編　AD1792-AD1815
R・ブルースほか著／淺野明監修　A5判　380頁

鉄道の歴史――鉄道誕生から磁気浮上式鉄道まで

クリスチャン・ウォルマー著／北川玲訳
241×158㎜　400頁　定価（本体2,800円＋税）

鉄道草創期から最新の高速鉄道まで、世界の鉄道のあゆみを豊富な図版とともに解説、多彩な切り口で「鉄道と鉄道がつくった世界」を活写。写真・地図など250点以上収載。鉄道ファンならずとも読んでおきたい鉄道の世界史の決定版。

航海の歴史
――探検・海戦・貿易の四千年史

B・レイヴァリ著／千葉喜久枝訳
241×158㎜　400頁　定価（本体2,800円＋税）

医療の歴史
――穿孔開頭術から幹細胞治療までの1万2千年史

S・パーカー著／千葉喜久枝訳
241×158㎜　400頁　定価（本体2,800円＋税）

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111

創元社

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル
Tel.03-3269-1051

ProQuest

お知らせ

コンソーシアム成立！

NII-JUSTICE共同購入コンソーシアムで、
定価よりもはるかに安くご購入頂けるようになりました

Early English Books Online

EEBO

申し込み期限：2020年3月末日まで
契約形態：大学・研究機関での1回買い切り・恒久利用
（個人での契約形態はありません）
価格：個別見積もり
参加条件：JUSTCE（大学図書館コンソーシアム連合）に
参加する機関であること

トライアル・キャンペーン実施中！

2016年12月26日までのお申込みで、無料で2か月間の機関トライアルを承ります。トライアル申し込みフォームをご請求ください。

※図書館／図書室等を通じてお申し込みください。
個人でのご利用をご希望の場合は、1か月間の個人トライアルを承っておりますので、別途お申し付けください。

お問い合わせは　紀伊國屋書店 学術情報商品部
tel: 03-6910-0518　email: online@kinokuniya.co.jp

・・・・・・・アティーナ・プレス社会史研究資料ご案内・・・・・・・

Athena Sources in the History of World War I

史上かつてない規模と様相を呈した第一次世界大戦の開戦から100年。
それぞれ異なる視点や論点から編集されている各種資料をラインナップ。

継続近刊！

African-American Soldiers in World War I 【アメリカ黒人兵と第一次世界大戦】

別冊解説：藤永康政（山口大学准教授）

第一次世界大戦に参戦したアメリカ軍に加わったアフリカ系アメリカ人について伝える9タイトルを7冊にまとめて復刻。
調査報告的なPart 1、戦場での経験を伝えるPart 2の二期構成。写真多数掲載。

Part 1: Histories	全3巻	・ ISBN 978-4-86340-223-2 ・	定価（本体 **62,000**円＋税）	2015年9月
Part 2: Witness Accounts	全4巻 ＋ 別冊解説	・ ISBN 978-4-86340-224-9 ・	定価（本体 **72,000**円＋税）	2016年10月

The Illustrated War News (1914-1918)

8回配本 全16巻 **継続刊行中** ・各配本定価：第1回配本－第4回配本（本体**95,000**＋税）、第5回配本－第8回配本（本体**86,000**＋税）
あのイラストレイテッド・ロンドン・ニュースの戦争特集週刊誌。貴重な全号揃い。特派員が戦場で取材した写真ほか、ニュース、地図、戦争画を大量掲載。

The "Manchester Guardian" History of the War (1914-1920)

全9巻・ISBN 978-4-86340-148-8・c. 3300 pp.・定価（本体**270,000**円＋税、分売設定あり）既刊
現在のガーディアン紙直系の戦争特集。半年ごとにレヴューする形態で編集整理された記事内容、戦後処理まで伝える。各巻インデックス付き。写真多数。

The War Illustrated: Album de Luxe (1915-1919)

全10巻・ISBN 978-4-86340-160-0 ・ c. 3900 pp. ・定価（本体**285,000**円＋税、分売設定あり）既刊
もともとデイリー・メールの出版グループが 1914 年夏から出した安価な大衆向け週刊誌。大量の図版が人気を呼び、愛蔵版として再編集されたもの。

The Great War... I was There! Undying Memories of 1914-1948 (1938-1939)

全4巻・ISBN 978-4-86340-161-7 ・ c. 2300 pp. ・定価（本体**176,000**円＋税、分売設定あり）既刊
第一次世界大戦終結から 20 年を経て、さまざまな階層の人々が綴ってきた戦争体験を多数の新出写真とともに掲載。

継続近刊！

L'Histoire de France par l'Image par Armand Dayot 【図説フランス史】

メロヴィング朝から普仏戦争、パリ・コミューンまでフランスの歴史に関する美術表象として重要なコレクション。
多岐にわたる美術品目の図像1万枚近くを収録！

Part 1: 450-1715	全3巻	・ ISBN 978-4-86340-200-3 ・	定価（本体 **82,000**円＋税）	既刊
Part 2: 1715-1815	全3巻	・ ISBN 978-4-86340-201-0 ・	定価（本体 **95,000**円＋税）	2016年9月
Part 3: 1815-1871	全4巻	・ ISBN 978-4-86340-202-7 ・	定価（本体 **95,000**円＋税）	2017年9月

新　刊　！

The Panama-Pacific International Exposition San Francisco, 1915 【パナマ運河開通記念 万国博覧会】

別冊解説：山里勝己（名桜大学長） 山城新（琉球大学教授）

カリフォルニアで開催された、パナマ運河開通記念の万国博覧会公式記録を復刻。
アメリカの第一次世界大戦参戦前夜、進歩主義的で技術的先進国の立場を主張した、「長い19世紀」からの脱皮を告げる重要な催しの全容！
日本の大掛かりな出展の意図を探る貴重な資料をPart 2に集成、当時の国際情勢分析にも有用！掲載写真約600枚。

Part 1	全5巻	・ ISBN 978-4-86340-225-6 ・	定価（本体 **128,000**円＋税）	2016年9月
Part 2	全2巻 ＋ 別冊解説	・ ISBN 978-4-86340-226-3 ・	予価（本体 **54,000**円＋税）	2017年9月

Athena Press
株式会社 アティーナ･プレス

〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18
TEL. 03-3946-2117 FAX 03-5977-8026
www.athena-press.co.jp
eigyo@athena-press.co.jp

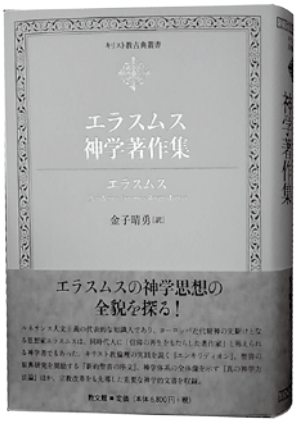
フランシスコ研究に不可欠な原典 ／ 宗教改革を先導した一大神学者

キリスト教古典叢書

アシジの聖フランシスコ伝記資料集

フランシスコ会日本管区 訳·監修　●A5判 820頁　本体 7,800円

中世最大の聖人・アシジの聖フランシスコに関する最初期の証言を集成した源泉資料集。チェラノのトマスによる初の公式伝記から、聖ボナヴェントゥラの『大伝記』、文学作品として名高い『小さき花』など聖人伝8作品を収録。



キリスト教古典叢書

エラスムス神学著作集

エラスムス 著 金子晴勇 訳 ●A5判 704頁　本体 6,800円

ルネサンス人文主義を代表的な知識人であり、ヨーロッパ近代精神の先駆けとなる思想家エラスムスによる『エンキリディオン』『新約聖書の序文』『真の神学方法論』ほか重要な神学的文書を収録。

数量限定出版

ギリシア語 新約聖書釈義事典

［全巻セット縮刷版］

ドイツ語版編集=H. バルツ/G. シュナイダー
監修=荒井 献/H. J. マルクス

A5判上製3巻セット函入
Ⅰ:544頁/Ⅱ:644頁/Ⅲ:600頁

新約聖書に現れる全ギリシア語の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす事典。

本体価格 **63,000円**

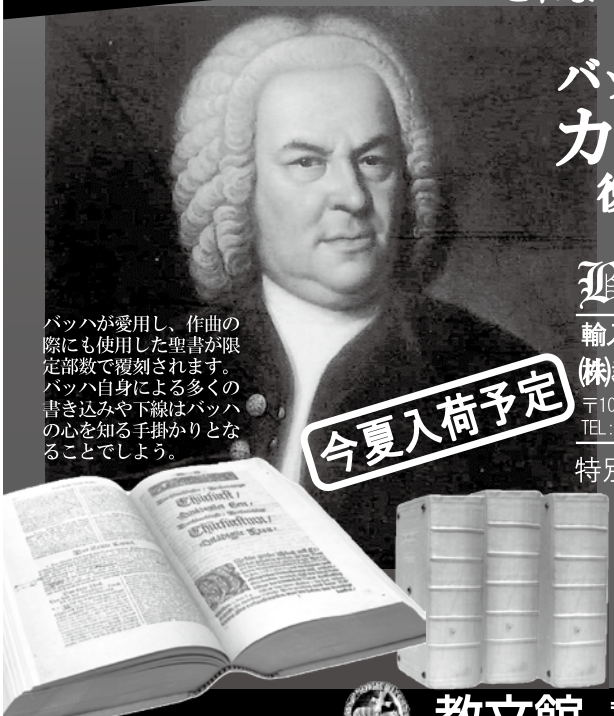
教文館出版部

TEL.03-3561-5549 FAX.03-5250-5107 《呈・図書目録》

教文館洋書部

TEL.03-3561-8449 FAX.03-5250-5109

これまでになかった、バッハの心に触れる喜び



バッハが愛用し、作曲の際にも使用した聖書が限定部数で覆刻されます。バッハ自身による多くの書き込みや下線はバッハの心を知る手掛かりとなることでしょう。

今夏入荷予定

バッハ愛用 カロフ聖書 復刻版・全3巻

（解説書付）

Bach's Bible

輸入総代理店

㈱教文館 洋書部

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL: 03-3561-8449 FAX: 03-5250-5109

特別価格 ¥790,000
通常価格 ¥980,000
（8%消費税込）

※特価期間は終了しましたが特価仕入分に若干余裕がございます。ご相談下さい。

バッハの音楽を愛する人への朗報

鈴木 雅明
（バッハ・コレギウム・ジャパン音楽監督）

J. S. バッハの受難曲や多くのカンタータに魅せられた者は誰しも、その信仰について、彼の心を覗きたい、と思うに違いない。1934年にアメリカ・ミズーリ州で J. S. バッハが所有していた『カロフ聖書』が発見され、その聖書に多くのバッハ自身の書き込みが確認されて、彼の心を解く重要な鍵が与えられた。教会音楽について、あるいは二重合唱について、バッハ自身が、出エジプト記や歴代誌から啓示を受けていたのだ。その聖書がこの度レプリカとして出版されることは、バッハの音楽を愛するすべての人へのこよなき朗報である。

祈る思いの音楽

徳善 義和
（ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校名誉教授）

バッハはこの『カロフ聖書』を 1733年に入手して、サインした。歴代誌までの第1巻に多くの書き込みが見られるが、その関心は「礼拝とは」、「音楽とは」なにかに集中していたようだ。歴代誌 下（5：13）に付した書き込み「祈る思いの音楽には常に神がその恵みをもって現在なさる」には、晩年の彼の教会音楽、いや音楽全体への思いが込められている。その意味でここでの書き込み全体は晩年の彼の音楽全般を理解する鍵のひとつとなろう。

教文館 〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1 《呈・図書目録》
ホームページをご利用ください。 http://www.kyobunkwan.co.jp/

MINERVA世界史叢書 シリーズラインアップ

A5判上製カバー／各巻予価本体5500円（税別）

2016年5月中旬刊行開始！

第Ⅰ期　世界史を組み立てる

総　論　「世界史」の世界史　秋田 茂／永原陽子／羽田 正／南塚信吾／三宅明正／桃木至朗 編著［5月刊行予定］

第1巻　地域史と世界史　羽田 正 責任編集［5月刊行予定］

第2巻　グローバル化の世界史　秋田 茂 責任編集

第3巻　国際関係史から世界史へ　南塚信吾 責任編集

第Ⅱ期　つながる世界史

第4巻　人々がつなぐ世界史　永原陽子 責任編集

第5巻　ものがつなぐ世界史　桃木至朗 責任編集

第6巻　情報がつなぐ世界史　南塚信吾 責任編集

第Ⅲ期　人と科学の世界史

第7巻　人類史と科学技術　桃木至朗 責任編集

第8巻　人と健康の世界史　秋田 茂 責任編集

第9巻　地球環境の世界史　羽田 正 責任編集

第Ⅳ期　文化の世界史

第10巻　芸術と感性の世界史　永原陽子 責任編集

第11巻　知識と思想の世界史　桃木至朗 責任編集

第12巻　価値と理念の世界史　羽田 正 責任編集

第Ⅴ期　闘争と共生の世界史

第13巻　権力の世界史　桃木至朗 責任編集

第14巻　抵抗の世界史　南塚信吾 責任編集

第15巻　秩序の世界史　三宅明正 責任編集

＊本情報は2016年3月下旬のものです。タイトル等変更する場合がございます。

新しく学ぶ西洋の歴史

――アジアから考える

南塚信吾／秋田 茂／高澤紀恵 責任編集

A5判美装カバー／450頁／本体3200円（税別）

西洋史・日本史・東洋史の第一線の執筆陣によって書かれた新たな概説書。
西洋の歴史を「身近」な存在として理解し、日本を含むアジアの歴史と西洋の歴史を連続させて把握できる。

ミネルヴァ書房　〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1＊表示価格税別　目録呈
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589 www.minervashobo.co.jp/

万国風刺漫画大全

世紀転換期の世界（全３巻＋別冊）

Caricatures and Cartoons, 1890-1905: A History of the World

●編集・解説● 橋本順光　（大阪大学文学部）

2015 年 9 月刊行　B5 判・全 3 巻　本体セット価 118,000 円 + 税　ISBN: 978-4-86166-186-0

世界 25 か国の雑誌・新聞約 300 タイトルに掲載された
時事・社会風刺漫画約 4,200 点のコレクション

- 1890 年に英国で創刊され世界各地の定期刊行物から記事をダイジェストした月刊誌『評論の評論』（*The Review of Reviews*）が掲載した、世界 300 以上の雑誌・新聞からの時事、社会風刺漫画を集大成。
- 英米だけでなく、独仏伊蘭やロシアなどのヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、南アフリカ、そして日本、インドなどアジアで発表された風刺画約 4,200 点を収録。
- 時系列な編集で、視覚的な世紀転換期世界の理解を可能にする。
- グローバルな視点からの歴史教育にも最適。

A Russian War Cartoon.

"Japanned."
The peaceful invasion of China is quietly going on while the war is being pressed against Russia.

Edition Synapse（エディション・シナプス）
101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-5
Tel: 03(5296)9186 / FAX: 03(3252)1822
E-mail: edsynapse@nifty.com